

2006年12月3日 待降節第一主日（C年）

今日から待降節が始まります。待降節とはイエスの誕生、つまりクリスマスについて3週間にわたり心の準備を行うことをいいます。

今日の福音 ([ルカ 2 1・2 5-3 6](#))ではイエスは私たちに、優しく次のようにさとされています。

「生活のわずらいで、心が鈍くならないように注意しなさい」と。

ギリシア語ではこの「わずらい」とは「メリンナ」と書かれており、ギリシア語の新約聖書原典では多用されています。例えば有名なイエスの「まかれた種」のたとえ話でも使われています。雑草のなかにまかれてしまった種は、発芽しても雑草、つまり日々の暮らしのわずらいによって、立派に育つことはできない、つまり神の説く生き方を実践できなくなってしまう、というたとえです。イエスの12人の弟子も、彼ら自身の将来について、不安を感じていました。イエスは次のように言っておられます。「空の鳥、地の花々を見なさい。神は鳥一羽一羽、花一本一本、どこにあるかご存知です。ましてや、神にとってもっと大切な人間については、なおさらのことです。ですから、心配(ギリシア語の動詞形ではメリンマ)する必要はありません。」

しかし、激しい競争社会で多忙な日々をおくる私たちは、物質的に何を所有するか、良い学校、良い仕事につけるか、そしてどのように昇進、発展していくかに心を砕き、その結果私たちは皆、生活にわずらわされ、不安を感じているのです。

このような私たちにイエスはどのようなお導きをくださっているのでしょうか？

一言で言うならば「信頼」です。

神を信頼しましょう。なぜならば神は私たち一人ひとりを気にかけてくださるからです。神は私たち一人ひとりに次のように言っておられます。

「私の目にはあなたは尊く私はあなたを愛している。恐れるな。」(イザヤ書)
これが空の鳥、地の花のメッセージです。しかし今日、ペトロ第一の手紙で言われているとおりに、「神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい。」(1ペトロ：5-7)のです。今日の福音ではイエスは私たちに「いつも目をさまして祈りなさい」と言っておられます。

神は私たち一人ひとり誠に気にかけてくださいますので、祈りを通じて、その優しいみ手に私たちの一切の心配事、不安をゆだねましょう。それが心の平安に至る道なのです。

2006年12月10日 待降節第二主日（C年）

待降節は私たちがイエスの誕生について準備する期間です。

では、どのように準備するのでしょうか。まず、私たちの信仰とイエスの教えの基本的な意味について、改めて「見直す」ことから始めましょう。（見直しとは信条

の転向までも意味します!) そして「神は私たち一人ひとり、あるがままを愛してくださる」というイエスの基本的な教えを思いおこしましょう。この最も大切な事実を深く認識することによって、私たちは喜びの贈り物を神からいただけるのです。

本日の第一朗読 ([バルク 5 : 1-9](#)) では、神殿を焼かれ遠いバビロンに虜囚となり、嘆き悲しむユダヤ人たちが描かれています。預言者バルクを通して神は、「絶望してはならない。喪服のような服を着るのをやめ、明るい色の楽しい服を着なさい。」と言いました。これは言い換えれば、「神はあなた方を愛しているので、希望を持ちなさい。神はあなたを気にかけているのです。」ということです。今日、私たちの神はまったく同じ言葉を私たちに言っておられます。

第二朗読 ([ピリピ 1 : 4-11](#)) では、聖パウロは「喜び」について語り、「イエスキリストはあなた方を愛していらっしゃいます」と言っています。神の愛と私たちの喜びは常につながっています。

福音 ([ルカ 3:1-6](#)) では、洗者ヨハネは私たちに、回心し悔い改めるよう求めます。これはつまり、現在の私たちの生き方をもう一度見つめなおし、新しいスタートをきるよう求めているのです。(いつでも、イエスの示す道に戻り、新たな出発をすることができるのは、大きな慰めであり、励ましです。) まさに人間であるからこそ、私たちは皆、曲がりくねったデコボコして険しい小道を、心のなかでたどっていかなければなりません。

心の扉を開けて、愛と光を招き入れ、神からの愛を受ける喜びを心の中で輝かせましょう。神からの力によってのみ、私たちは曲がりくねった心の中の道をまっすぐに、なめらかにすることができます。

待降節に備えてちょっとした練習を試みましょう。鏡に映った自分の顔を正視し、自分の目をみつめてみましょう。そして、その目を通して自分の心を深く見てみましょう。あるがままの自分を見、そして大きな声でつぶやいてみるのです。

「神は、あるがままの この私を愛してくださる」と。今週はこのことをやってみてください。寛大で愛情にあふれる神からの贈り物、心の平安と喜びを感じることが出来るはずです。

2006年12月24日 待降節第四主日 (C年)

今日の聖書 ([ミカ書 5 : 1-4](#)、[詩編 80 編](#)、[ヘブライ 10 : 5-10](#)、[ルカ 1 : 39-44](#)) は、深い祈りを行う者にとって示唆に富むものがあります。ミカ書と詩編では、救い主とは、自分の群れの一匹一匹を本当に気にかけて世話をするような、羊飼いにたとえられています。また今日の福音では聖母マリアが自分自身の都合や計画をおいて、いとこのエリザベスを助けるために四日間の旅に出発する情景が描かれています。ここでマリア様は、私達にお手本をみせてくださいます。

ここでヘブライ人への手紙にあるこのキリストの言葉を見てみましょう。「神よ、どうぞご覧ください。わたしは来ました！」 私たちが祈りを始める時にもこの言葉を使ってみましょう。祈りとは私たちと神との出会いの場、私たちは何も包み隠さず、素直に神と対話するのです。最初に私たちは神に対し、「神よ」と呼びかけます。これにより私たちの祈りは、軸がすわり、はっきりしたものとなります。そして次に言うのです、「わたしは来ました！」と。これは、包み隠さず、あるがままの私自身で神の前に来た、ということの意味します。

普段のように自分自身を飾ったりせず、あるがままの弱さ・はかなさを抱えた人間として、そして時として少し壊れてしまった人間として、神の御前に立つのです。神ご自身も人間であることを経験されていらっしゃるから、その弱さ、はかなさ、壊れやすさをとてもよく理解してくださいます。ですから、「わたしは来ました！」という言葉にはとても深い意味があります。しかし、このヘブライ人への手紙にあるように、私たちはさらに「わたしは【あなたのご意思を果たすために】来ました！」と付け加えたいと思います。「神よ、私はあなたが私を本当に気にかけてくださることを知っております。私のすべてをあなたの御手にゆだねます」

自分自身の言葉で、このような祈りをしてみましょう。今あなたの心の中にあるものが、あなたの祈りの材料となるのです。

2007年1月7日 主の公現(C年)

しばしば、聖書は2層の構造となっていることがあります。上の層は、古代の歴史的な出来事を叙述したものです。下の層は、今日の私たちに働きかける現在の信仰です。

今日の聖書は、主の公現（これは神ご自身が我々の前に姿を現されたことを意味するのですが）について書かれています。これを例にとってお話ししましょう。

誕生したイエスに会いに来た三人の博士は、ユダヤ人ではありませんでした。これは歴史的な出来事です。しかしイエスは、ユダヤ人のみならずすべての人々にとって、頼ることができる存在だったのです。また三人の博士は、不思議な星により導かれイエスのもとに到達しましたが、これも私たちが神ご自身の導きにより、神に到達できることを暗喩しています。

これを、自分自身の人生にあてはめ、振り返ってみました。私には、イエスとの出会いという、とてつもなく大きな恵みが与えられました。イエスは私の人生の旅を、慰めや力をあたえてくれる同伴者として、ともに歩んでくれています。イエスは、とてもはかない存在の人間であるわたくしを、あるがままに優しく受け入れてくださいます。

このような神の恵みに私はとても感謝していますが、神はこの恵みを他の人々と分け合うように、と願っているのです。

皆さん、私たちの心の中の宝箱をあけてみましょう。

三人の博士がイエスに黄金をささげたように、私たちは、価値ある贈り物として「思慮深さ」を隣人にささげましょう。

三人の博士がイエスに香料をささげたように、私たちは、香り高い「感謝と優しさ」を隣人にささげましょう。

三人の博士がイエスに没薬をささげたように、私たちは、美しく、不思議で素敵な香りのする「許しと和解」を隣人にささげましょう。

神よ、これらの宝物を私たち示していただいたことを感謝します。 神に感謝。

2007年1月14日 年間第2主日(C年)

ヨハネによる福音書の中でイエスは奇跡を7回しか起こしていませんが、これを行うにあたってイエスは特別な言葉をつかっています。イエスは奇跡を「しるし」と呼んでいます。奇跡は実際にあった歴史的事実ですが、それだけではなく、現在に生きる私達により深い意味を示しています。

今日の福音 [\(ヨハネ2・1-11\)](#) ではカナの婚礼でイエスが水をぶどう酒に変えた奇跡が描かれています。ここでは、「イエスは、この最初のしるしを ガラリヤのカナで行って、その栄光を現された。」と記されています。

ユダヤ教の清めの儀式のための水をいれた壺が6個ありました。それは、厳格に強制された宗教的儀式のための味気のない水でした。このとき神は恐れ多い、遠いものであり、神との交流は楽しいものではない、味気の無いものでした。

イエスはそれをすべて変えてしまったのです。神は、イエスが人間としても 一生を送ったことにより、とても近いものとなり、私達人間はよろこびをもって 神と話せるようになりました。味気の無い水が、喜びをもたらすぶどう酒に変容したのです。

イエスは神が人間になったものです。新郎新婦が、食べたり飲んだり、笑ったり、贈物を楽しんだりしていたカナの婚礼に、神は現れたのです。新しい時代の訪れ、「しるし」とはこれを現すのです。イエスは喜びを私達に伝えるために人の世に 現れました。イエスは私達を彼の饗宴、彼の食卓に私達を招いているのです。

私達が痛み、悲しみに苦しんでいるときですら、この神の特別な喜びを経験 することができます。ではどのようにそれはできるのでしょうか？

こころを落ち着かせ、静かに祈ってみましょう。そして、神の声、「恐れるな、私はあなたとともにいる」を聞きましょう。

私達はけっして一人ぼっちではなく、わたしたちには同伴者、助けてくれる方がいます。これこそが、「喜び」の源泉なのです。

しかし、この喜びを得るために、イエスは二つの事を私達に望んでいます。それは、(1) 祈りを通じた神との交流(「私のもとに来なさい. . . .」)、(2) 隣人とこの信仰と喜びを互いにわかちあう、ということです。

これを読まれる皆様が、この「喜び」を味われるよう、神に祈ります。

2007年1月21日 年間第3主日(C年)

毎回のミサの中で、私達は「言葉の典礼」、つまり聖書朗読を行います。第二バチカン公会議で述べられているように、「特に教会において聖書が読まれるときに、イエスは現代に生きる私達に直接語りかける」のです。聖書は我々への神のメッセージであり、その深い意味を理解するには神の助けが必要です。聖書を聞くと

きには、私達は常に「このメッセージは現代に生きる私達に、今どのような意味をもっているのだろうか」と耳を澄まして聞く必要があります。なぜなら、聖書は私達の日常の生活を助けるための神のメッセージであるからです。さて、こうしたことをふまえて、今日の聖書をみてみましょう。

第一朗読は紀元前600年頃の旧約聖書の一場面です。バビロン捕囚からエルサレムに帰ったばかりのユダヤ人は、荒れ果てたエルサレムや神殿をみて、これでは再建は不可能だと落胆しました。しかし祭司エズラが聖書を読むと、人々は気を取り直し、とても力強く励まされた気持ちになりました。聖書を通じて神が語りかけるといことは、現代においてもかわりはありません。

第二朗読では、パウロが寓話を用いている様子が描かれています。すべての教会、共同体は大小さまざまな才能を持った人々の集合体です。異なる機能を持つ人体の各器官がひとつの体として動いているように、わたしたち教会、共同体に属するひとびとが統一をもって働けるようにいたしましょう。どうか決して「わたしは無能である」などと言わないでください。私がかつて勤務した教会では、ある婦人がご自身のことを足の小指だとおっしゃっていました。しかしその方は教会の洗面所の八箇所トイレのトイレットペーパーが切れないようにするという責任を負ってくださっていたのです。高齢あるいは健康のため、活動はもう無理というかたもいらっしゃるかもしれませんが、しかしそのような方でも、皆のために祈ることができるという点で、教会にとって最も貴重であることにはかわりはありません。

あなたはご自身が貧しいと感じられていますか？物事を成したり、覚えていることが難しくなったとお思いですか？自分自身がもはや社会にとって不適格者になってしまったとお考えですか？どうぞ神の力に頼ってください。それこそがまさにイエスが私達にすべきこととして伝えたことなのです。イエスは、神があるがままの私達を愛してくださる、という良い知らせを伝えてくださったのです。

あなたは、特定の人、場所あるいは癖などにこだわりがあり、それから逃れたいと思っていますか？神はそれらから解放してくださいます。

あなたは、他人の苦しみについてわかっていても目を閉ざしがちですか？新しい視野を持てるように神に祈ってください。イエスはそれを与えてくださいます。

あなたは、他者に虐げられていますか？あるいは忙しさとストレスで気持ちが落ち込んでいませんか？イエスはあなたを自由にするためにこの世に来て下さったのです。

誰でも、自分の心の中で起きている出来事を重ね合わせて、聖書を読むことができます。聖書をゆっくり、祈りとともに読んでみましょう。すると、きっと心のなかで小さくともピンとくるものがあるはずです。聖書は永遠の「現在形」で書かれており、今あなたに読まれるためにあるものです。

2007年1月28日 年間第4主日(C年) [ディン神学生]

[ルカ4・21-30](#)

イエスのもたらされた救い

今日の福音は先週の日曜日に朗読された福音の続きが朗読されました。今日朗読された福音ではイエスのもたらされる普遍的な救いが語られています。

イエスはヨルダン川で洗礼を受け、荒れ野で誘惑を受けてから、ガリラヤに帰られ、宣教活動を始められました。私たちが知っているとおりに、イエスの生涯は父である神だけではなく、絶えず聖霊と密接に結ばれていました。イエスは洗礼を受けた時と同時に宣教活動の時も聖霊の力に満ちあふれていました。宣教活動をしているイエスのことばと行いはとても優れていたもので、イエスは皆の人から尊敬を受けられました。

今日、イエスはお育ちになったナザレに戻り、いつものとおりに、安息日に聖書を聴き、祈るために、会堂に入り、イザヤ書を朗読するよう頼まれました。朗読を終えて、イエスは「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われました。つまり、イエスのご自分が預言者たちが語ったことを実現するために、来られたことを示され、そして救いの時が来て、もう始まったことを宣言されたのです。会堂にいた人々はイエスの口から出た恵み深い言葉に驚いて、互いに言いました。「この人はヨセフの子ではないか」。「ヨセフの子」というのは大工の息子、一般的な人の息子という意味です。しかし、それにも関わらず、こんな言葉が発言できるイエスとは、「いったい誰だろう」と疑っていました。また、「この人はヨセフの子ではないか」という言葉は「ほめことば」の意味も含んでいると思います。一方、彼らは「もしイエスが本当にヨセフの子だったら、今優れた預言者として、どうして自分の故郷の人々のために、何もしてくれないのか」と考えていました。なぜなら、彼らはイエスがカファルナウムで行われたいろいろな出来事を聞いていたからです。要するに、彼らは自分たちの利益だけを考えてしまい、彼らがイエスを信じるために、先にイエスが何かの奇跡を行うことを要求したのです。

しかし、イエスは父である神から受けた使命を彼らにはっきり言われました。つまり、イエスのもたらす救いはイスラエルとご自分の故郷の中に限定されているのではなく、すべての人々に与えられるものです。そこで、イエスは具体的に歴史的な出来事を用いて、すべての人々に与えられる神の救いについて、語られました。イスラエルに大飢饉が起こったとき、預言者エリヤはイスラエルのやもめたちのもとに遣わされ、シドン地方のサレプタのやもめのもとだけに遣わされました。さらに、預言者エリシャはイスラエルに重い皮膚病にかかっている人々のもとに遣わされ、シリア人ナアマンのもとに遣わされました。

シドン地方のサレプタのやもめとシリア人ナアマンはイスラエルの人々ではなく、異邦人に属する人たちですが、それにも関わらず、預言者エリヤとエリシャによって、いやされました。ここで注目しなければならないことは二人の預言者エリヤとエリシャはイスラエルに属していますが、イスラエルの人々に受け入れられないで、異邦人たちに歓迎され、受け入れられたということであり、イエスの場合も同じと言えます。つまり、イエスの故郷の人々はイエスを受け入れるよりも、むしろイエスに色々なことを要求してしまいました。一方、カファルナウムにいる異邦人たちはイエスを受け入れたからこそ、イエスの行われた奇跡の恵みを受けることができました。

この福音を通して、ルカはイエスのもたらす救いを受けるために、信仰が必要であると強調しています。それゆえ、イスラエルの人々であるか、異邦人であるかに関

わらず、イエスを信じるならば、イエスのもたらす救いの恵みを受けることができます。イエスのもたらす救いの恵みはある地域に限定されているのではなく、すべての人々に与えられるものです。

私たちは洗礼を受けて、イエスの弟子になり、イエスの予言職にあずかっていることを意識しながら、日々の生活の中で、どんな状況においても、イエスを受け入れ、イエスの証し人となることができるよう、父である神に願いましょう。

2007年1月28日 年間第4主日(C年)[ケنز神父]

第一朗読で描かれているエレミアはとても人間的な預言者でした。人々はエレミアとその教えを拒否したので、彼は非常に傷つきました。心に傷を負ったエレミアに対して神は次のように言いました。「恐れるな、私はあなたとともにいる。私はあなたを助けよう。」神は同じ言葉を私達に言うておられるのです。

福音書の中でイエスも彼自身の友人とナザレの親族に拒絶されています。イエスは人間でもあったので、彼もこの傷ついた感情を持っていました。

しかしイエスは神でもあり、われわれはその神に祈ります。イエスは、「恐れるな、あなたが苦しんでいる時に、わたしはあなたと共にいる。」と言っています。私達が寂しさ、心の痛み、疎外感を感じた時に、私達はイエスも同じ苦しみを持ったのだと、信頼してイエスに頼ることができます。イエスはわかってくさるのです。

なぜナザレの人々はイエスを拒絶したのでしょうか。彼らは、たかが大工の息子であるイエスがかれらの指導者になることを受け入れられなかったのです。さらにイエスの、神は誰でもわけへだてなく人間を愛してくさる、という教えを、受け入れられなかったのです。(ナザレの人々自身が、ユダヤ教では、外国人として差別されていたのにもかかわらず、です。)彼らの視野はとても狭く、内にこもったものでした。

第二朗読においてパウロはイエスが語っていた愛とはどういうものなのか説明しています。「愛」という言葉は乱用されすぎていて、いまやその深い意味を失ってしまいました。私達の人々への愛とはどういったものなのでしょうか。その愛は、(イエスを見捨てたナザレの人々のように)狭く、内にこもったものなののでしょうか。自己中心的で引きこもったものなののでしょうか?

この聖パウロの言葉をもう一度ゆっくり読み、自分の良心を確かめてみましょう。他人への愛を広げましょう。

神は私達一人ひとりを愛してください。その温かさを隣人と分かち合いましょう。

2007年2月4日 年間第5主日(C年)

聖書の大部分がそうであるように、今日朗読された聖書にも二層構造の意味があります。表層の意味では、歴史的な出来事の叙述にすぎませんが、深層の意味は現代に生きる私達に直接かかわるものがあります。どうかルカ5：1-11をもう一度読んでみてください。

神は、漁網を洗っている（乏しい漁獲を悲しみながら、あきらめている）現代の私達に直接働きかけてくださいます。神は不思議なやりかたで私達に働きかけ、その目的は私達の間人として、キリスト教徒としての成長、我々自身のためになっています。

あなたはかつて（あるいは現在）気持ちが深刻に落ち込んでいたことがありますか？妻として夫として、親として友人として、職場で学校で、（わたしにとっては神父として）、そのような苦境があったでしょうか？このような困難の淵に沈んだ時こそイエスは私達に呼びかけてくださるのです。

「沖に漕ぎ出し、網を投げよ。」と。これはすなわち、「勇気を出して新しい一歩を踏み出さなさい。新しいスタートを切るのです。」ということなのです。

イエスから与えられるこのチャレンジ（挑戦すべき課題）は、友人の口から届けられるかもしれませんが、経験から発するかもしれませんが、あるいは本やテレビから来るかもしれませんが。この「漕ぎ出でよ。（すなわち、再出発せよ。）」というチャレンジは、失敗、拒絶、病気あるいは愛するものの喪失など救いようのない絶望の中でやってくるものなのでしょう。この神からのチャレンジは、さまざまな人々に、さまざまな形で、しかし確かに与えられます。この神からのメッセージに耳を澄ましていきましょう。

チャレンジにどう応じていこうかと考えると、私達の足はすくんでしまいます。えてして私達は言い訳をしてしまいます。「私は一晩中漁をしていましたが、何も獲れませんでした。」あるいは「神様、私を放っておいてください。私は罪びとです。」というものは、まさにこれにあたります。

再出発の極めて重要な第一歩を踏み出すには、人間の持つ勇気などはとてもちっぽけなものです。その一方、神からのチャレンジを無視する言い訳づくりには、人間はとてもたけているものです。逃げることは、私達は得意なのです。

しかし私達が祈りの中で我々自身を鎮め、落ち着いて神の声に耳を澄ませば、生きている声として聞こえてくるものがあります。「恐れるな、私はあなたと共にいる。共に、沖へ漕ぎ出よう！」この時です、私達が再び私達の人生を始めることができるのは。暗闇に苦しむ家族・友人に光を与える、この聖書の箇所がいう「漁師」になれるのです。

「沖へ漕ぎ出で、網を投げよ。恐れるな、私はあなたと共にいる。」

2007年2月11日 年間第6主日(C年)

平成時代のイエス様の証人に

主任司祭 バリー・ケンス神父

私は若い時から歴史が好きです。五十年前に日本に来てまもなく私は、二六人の日本の殉教者の話を聞きました。私は非常に心をうた



れ、殉教の現場である長崎まで巡礼しました。私が関心したところは、長崎での殉教そのものよりも、京都から

長崎までの寒い冬の三ヶ月間の無理な旅路のことです。そしてこの二六人の集団は日本の国際化の始まりです。二六人の中の二〇人は日本人とヨーロッパや南米から来た宣教師もいました。そして二六人の中には侍も司祭も伝道士も大工も混血の人も親子も三人の少年もいました。

いろいろな国、いろいろな年、いろいろな地位の人々でしたが、イエス様のおかげで兄弟一致を保っていました。京都から長崎への旅路の途中の町で、みせしめのために、耳をきられ犯罪人として、引き回されました。その目的は一般の人々にキリスト教を信じるとこのようになるという恐れを抱かせるためでした。ところが大勢の人々は恐れのかわりに、二六人の証をみて、尊敬の心を持ちました。

その尊敬とはイエス様への信仰の具体的な例を見たからです。大勢の人は始めてイエス様の道の雰囲気を感じました。というのは信仰の喜びと共同体の一致、相互の愛でした。それを私達が感じる事ができるようにトマス小崎の母への手紙をあげましょう。

「母上様、聖主のお恵みに助けられながら、この手紙をしたためます。罪標にしるさされている宣告文にありますとおり、私達霊父様以下二四名(途中二人が追加された)の者は、長崎で十字架につけられるようになっていきます。どう

か私のことも、父上様とも、何一つご心配な事なくください。天国で母上様をお待ち申しておられます。この世のすべては夢のえ失せてしまうことを母の永遠の幸福をゆめゆめのないようにお心がけ。人が母上にいかなることとも、忍耐し、かつ多くの愛をお示しくだ。それからとりわけ弟、ファイリポに関しては、を異教徒の手にゆだねないように、よろしくお願ください。安室園三原の



この二六人は約四〇〇吉の時代のイエス様の証人皆さん、私達はこの二六名です。私達は平成時代での証人です。「誰でも人々の前での仲間であると言ひ現(マタイ一〇一三三)は私達に生きています。声でいられます。

2007年2月18日 年間第7主日(C年)

「汝ノ敵ヲ愛セヨ、汝ヲ憎ム者ニ寛大デアレ」 「汝ヲ罵ル者、汝ヲシイタゲル者ノ為ニ祈リナサイ」と言われたら、正直どうでしょう？

「そんなこと絶対に無理です！」とおっしゃるでしょう？、そう、そのとおりです。人間はそれぞれ異なっているので、人との仲たがい、ちょっとした衝突は、世の常です。

しかし、イエスはそれを許すように命じています。「そんなこと、無理です」と、またあなたはおっしゃるでしょう。私達は他人の（心ない）言動によってしばしば傷つき、その相手に対して憤りや強い不満を持ちます。私達はそんな憤り・不満を押し殺したり、忘れようと努力することはできますが、怒りのあまり眠れなくなったり、ノイローゼ気味になるほどストレスを感じるようになると、これら押し殺していた心の傷が表面に出てきます。これらはあたかも癌が表面に出ず、内面を食い荒らしているようなものです。これらについて、私達が対処すべき方法があります。これらは、必ず、祈りの心を持って行わなければなりません。（これらは、単なる心理療法的な療法ではありません。）

1. まず、神様に自分が現在どうしようもない状況であることを認め、神様に助けを求めましょう。
2. 神様の温かい配慮のもと、あなたの心の傷口と向かい合ひましょう。
3. 神様に助けを求め、祈りつつ、あなたを傷つけた人の心に入っていくみましょう。その人の生き立ち、人格、その人の持つストレス、考え方等等。人の心の働きはとても複雑です。他人を理解することなしに、他人を許すことはできません。無理にその人を無罪潔白に仕立てなくても良いのです。ただ、そのような人もいるのだと理解しようとしましょう。
4. 一方、祈りながら神があなたを幾度となく許し、理解し、受け入れてくださったかを思い出しましょう。過去、何度も、何度も、何度も、あなたは神に許されているのです。
5. また、祈りながら、十字架に釘で打たれて磔刑となったイエスを想いうかべて見ましょう。兵士が手を十字架に釘で打ちつけている時に、指導者たちは皆イエスをあざ笑っていました。（それはあたかも現在の「いじめ」のようなものです。）イエスは「父よ、彼らを許してやってください。彼らは自分が何をしているのかわかっていないのです。」と祈ったのです。

もしあなたが、「わたしはあの人を許したい」と思えるような心境に至った時、あなたは平和へ向かい始めたということになります。その時は、またゆっくりと聖書を読み、自分だけでは対処できないことを認めつつ、神の助けを請いましょう。神の助けは必ずきます。神はとても寛大なのです。

2007年2月25日 四旬節第1主日(C年)

復活祭の準備である四旬節が始まりました。四旬節は、私達の生き方の基本を見つめなおす、「心の棚卸し」の時でもあります。今日の聖書は、そのような私達に指針を与えてくれます。

第一朗読（申命記26・4-10）では、私達は追憶の祈りの例をみることができます。この祈りのように、私達も両親や祖父母、祖先を思い出してみましょ。またあなた自身の良かった時、苦しかった時を思い出してみましょ。これらの出来事や人々を、神とともに思い出してみるのです。こうすることでこれらの出来事や人々について、新しい見方ができるのです！ 私達は神を発見し、「神の強力な助けの手が、私達に長く差しのべられる」ように、私達の実際の暮らしに実際に作用するのがわかるようになるのです。第二朗読（ローマ10・8-13）では初代教会のもっとも基本的な信仰箇条、イエスは我が主である、に触れています。主は常に私達を気にかけてくださっているということを常に思い出し、すべてを主の御手にゆだねましょ。福音（ルカ4・1-13）では、イエスが荒れ野に行き、物質的な物への誘惑、権力を行使する誘惑、自分の力を誇示する誘惑という、人間の三つの誘惑に打ち勝つ様子が描かれています。私達も、精神的に、荒れ野へ行く必要があります。そこでは世俗的な雑音、利便、娯楽がないゆえに、神と直接出会うことができるのです。私達は内側にある自分自身と対面し、実際の自分がどんなにみじめであるか実感します。言い換えれば、私達はそこでしみじみと神と神からの助けが必要だと実感するのです。

灰の水曜日に私達の額は灰で印をつけられ、「回心し、良い知らせを信じなさい。」と言われます。回心は日本語では、回る心、と書かれます。また、「良い知らせ」とは、神はあるがままの私達を愛してくださる、ということです。ですから、自分自身について新しい見方をするようにし、心の向きを変えて、新しいスタートを切りましょ。そして神が私達ひとりひとりを愛してくださるということ信じることです。

2007年3月4日 四旬節第2主日(C年)

聖書は二つの部分、旧約聖書と新約聖書からなります。

聖書（テスタメント）は双方向の約束（または契約）を意味する言葉です。ですから、全ての聖書を通じて、この約束はもっとも重要な主題となっています。神ご自身が人間に対して厳粛な約束を行い、私達も同じ約束を神に対して行うのです。

今日の第一朗読（創世記5-18）では、神はアブラハムに対して厳粛な約束を行っています。それは3,500年前の出来事でした。しかし神は、その厳粛な約束を今日の私達一人ひとりに対して行っています。神の約束は「あなたは私の特別に選ばれた子供です。私はあなたとともに常にいます。私は常にあなたの面倒をみます。」というものです。

キリスト教徒である私達は、教会で洗礼を受けることで、神がこの約束を正式かつ公けになさったことを信じます。

神の約束は永遠のもので、また無条件のもので、これは、もし私達が神を忘れたり、さらには神を拒絶・否定したとしても、神は私達を忘れたり気にかけるのをやめるといったことはない、ということです。

神が自分たちを気にかけてくださるという神への絶対的な信頼のもと、アブラハムはハランにある家を捨てて、彼がどこへいくのかも知らず、見知らぬ砂漠へ旅立ちました。彼は神が彼の面倒を見てくださるという約束だけを知っていたのです。アブラハムにはそれだけで十分でした。「わが主よ、わたしはあなたを信じます。」これがアブラハムの神への約束でした。アブラハムは私たちの手本、あるいは聖書がいうように、「アブラハムは私たちの信仰の父」でした。

今日、自分自身にこのように言ってみましょう。

「神ご自身が、とるに足りない私に約束をしてくださった。」

何度もこのことを考え、祈りましょう。これにより新しい元気が生まれ、また私たちの日常の生活に新鮮な意味を見い出せるはずです。

神を信頼しましょう。神はかならず約束を果たしてくださいます。

2007年3月11日 四旬節第3主日(C年)

あなたの日常の暮らしに、特別な味わいを持たせたいと思いませんか？

もしそうなら、ちょっとだけ神様のために時間をさき、お祈りしてみましょう。しかしその前に、その神様とは何なのでしょう？

今日の第一朗読（出エジプト：3:1-15）を読むと神がどのようなものであるか、おぼろげにわかります。モーセと同様に、神は私たちに対しても、触れ合いたいと望まれています。神は私たち一人ひとりを個人名でお呼びになります（イザヤ43：1）。神はエジプトで捕らわれていた人々の嘆きの声を聞き入れたように、私たちの助けを求める声を聞いてくださいます。まったく、「神は慈愛に満ち、怒るに遅く、慈しみ深い」（詩篇103）のです。神は私たちを、暖かく、愛に満ちた関係へといざないます。ただ、その関係は尊敬によって調和がとれているもので、比喩的にはモーゼが靴を脱いだように、私たちもそのような態度をとるのです。聖書に基づいた正しい神のイメージを持つことによって、私たちは日々の生活と祈りをより味わい深いものにすることができます。イエスは「愛に満ち溢れた神」の自画像です。私たちはイエスを見ることにより神に出会えます。

福音において、イエスは「人々を罰する神」という教えに激しく反対します。神はそのようにお働きになりません。しかし迷信はしばしば知らぬ間に広がり、私たちはそのように考えがちです。ガリラヤ人と塔の下で倒れた人々は、罪深いからといって死ぬことはありませんでした。神は罪びとを愛し、彼らが再スタートを切れるよう、招きます。

三年も実をつけなかったイチジクの木を、持ち主は「切り倒してしまえ。」と言いました。庭師は「いえ、もう一年待ちましょう。わたしが特別にこの木を世話します。」と言いました。このたとえ話の意味は、「今、新しいスタートを切りましょう。延期はできません、なぜならば私たちの時間は限られているからです。」ということです。

真剣に祈りをするのに私たちの時間は限られています。今すぐ、始めましょう！

誰かを許すのに私たちの時間は限られています。今すぐ、始めましょう！

良い親（あるいは子供）になるには私たちの時間は限られています。今すぐ、始めましょう！

人に優しく、思慮深く振舞うには、私たちの時間は限られています。今日から始めましょう！

最後に、これらを行うにあたり、神の力の助けが絶対に必要なことを忘れてはなりません。お祈りをし、神の助けを求めましょう。自己流で行う再スタートはうまくいきません。

2007年3月18日 四旬節第4主日(C年)

「神は愛である」私達がしばしば耳にする一節です。しかしこの真実を実際に心の奥底まで染み通らせましょう。今日、イエスは有名な「放蕩息子のたとえ話」をされました。実際のところ、この話は、極めて寛大・寛容な父親の話であります。私たちはこの話をすでに知ってはいますが、今週は、神はあるがままの私達を愛してくださるというメッセージをもう一度熟考してみましょう。

この話には三人の登場人物が出てきます。

1. 次男：彼の放蕩よりも、父親の包容力・無条件の愛が勝っていたということに注目しましょう。
2. 長男：彼は冷淡で非寛容で、父親に愛されて当然と考えていました。この点において彼も父親を侮辱していたのです。
3. 父親：この二人の息子の父親は、息子二人とも愛していました。

次男は父親を侮辱し家を飛び出し、家出の際に与えられたお金を浪費してしまいました。これにもかかわらず、彼の父親は家から出て道の向こうから次男が帰ってくるのを見つめて待っていました。そして次男を見つけると走り出て彼を抱擁したのです、「我が家へおかえり！」と言って。

父親のこのような寛大さに長男は憤慨してしまいました。次男には許しよりも、まず罰が与えられるべきだと考えていたからです。憤慨した長男は父親が待つ家に入ろうともしませんでした。しかし、この愛情深い父親は長男に会うために家から出てきたのです。

ある日本人は私に、「実際、この世のどんな父親だって、こんなに寛容な人はいませんよ。」と言いました。それは、そうです。

しかし私達の父である神は、私達一人ひとりに対して、こんなにも優しく、あわれみ深く接してくださるのです。

今週、静かな時間を少なくとも5分は持ち、「神の抱擁」を感じてみましょう。神は私達のあるがままを受け入れてくださいます。

私達は神の愛に包まれているのです。

この深遠な事実を体感することで、私達の日常の暮らしは、すばらしく味わいのあるものになっていくのです。

2007年3月25日 四旬節第5主日(C年)

四旬節第三、第四、そして第五主日の福音にはとても特別なメッセージがこめられています。これら3つの福音に共通していることは、あるがままの私達を神が愛してくださるといふ、根本的な真実であり、私達の心を解放してくれるものです。神は私達がいかに弱いことをよく知っておられ、それゆえ非常に忍耐強く私達に接してくださいます。

この3つの福音は、(1) 実りの無いイチジクの木のたとえ話（「どうか切り倒さないでください、わたしが心をこめて世話をしていきますから」と庭師は頼みました）、(2) 放蕩息子の帰還を待ち続け、外へ駆け出して出迎えた極めて愛情深い父親のたとえ話、そして本日の(3) イエスがこれらの教えを実行でしめした出来事です。不貞罪を犯した女性に、冷酷で非寛容なファリサイ人達は「石打の刑だ」と決めつけてしまいました。しかしイエスが「罪を犯したことの無い人が最初の石を投げよ」と言ったところ、集まった群衆は徐々にいなくなりました。

私は個人的に、「Good News Bible」という本の挿絵（スイス人画家：アニー・バロトン作）が気に入っています。今日の福音の部分では、イエスが考え事をしながら地面にとりとめもなく落書きをしている様子が、極めて人間的に描かれています。次の絵はイエスが、この気の毒な女性を正面から見つめている絵です。イエスは、（同じように）木に登ってイエスを見ようとしたザアカイの顔もみつめました。そして、イエスの、（ザアカイの苦労・問題を瞬時に理解した）優しい顔が、ザアカイのその後の人生を変えたのです。同じように、イエスは三度もイエスを否定したペテロの顔を優しく見ました。そのイエスの同情的な顔は、その後のペテロの人生を、絶望から希望へと変えたのです。同じイエスの温顔が、今日の福音の女性の人生を変えたのです。

このイエスの優しい顔、というのは、単に2,000年前の出来事ではありません。この現在もイエスは、同じ優しい同情にあふれる顔を、あなたや私に向けてくださっているのです。ですから私達は「この優しさと憐れみの冠に、私達を自信を持って近づかせてください」（ヘブライ人への手紙）と祈るのです。このような意味をふまえ、一緒に祈りましょう。

”あなたにむかって、わたしの心は言います、「主よ、わたしはみ顔をたずね求めます。み顔をわたしに隠さないでください。」”（詩編：28-8）

2007年4月1日 四旬節 枝の主日(C年)

今日の日曜日は、枝の主日と受難の主日という二つの名前を持っています。枝を持つての行列と祝福は、イエスが神であるという意味でのイエスの王権を示しています。一方、受難はイエスが私達人間とともに、人間として苦しんだことを示しています。イエスは100%神であるとともに、100%人間でもありました。この神秘をバランス良く理解することは重要なことです。

本日のルカによるイエスの受難 [\(ルカ 23 : 1-49\)](#) では、イエスが無罪であったことが強調されています。ローマ総督ピラトとユダヤ王ヘロデにより、「良い盗人」により、そして百人隊長により、それぞれイエスは無罪であったとされています。

罪が無いにもかかわらず、私達を救い私達の中に平和をもたらすために、わが身を惜しみなく捧げられました。ガラテヤ人への手紙 [\(ガラテヤ : 2 : 20\)](#) でパウロは「神の御子は、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた」と言っています。このように、イエスのご受難は私達一人ひとりに、現在も関わってくるものなのです。

遠藤周作はこれを次のように説明しています。「神の愛を実際に示すために、イエスご自身が最も恐ろしい形で死と出会わなければならなかった。イエスは私達に向き合いこう言うのです。「御覧なさい。私はあなたと同じ側にいるのです。あなたと同じような苦しみを受けてきました。私自身が自分のこととして経験しましたので、あなたの惨めさを私は充分理解します。」と。

ヘブライ人への手紙 [\(ヘブル 4 : 15-16\)](#) の中でも「イエスはわたしたちの弱さを思いやってくださる。すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だからわたしたちは、あわれみを受け、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるため、恵みの御座に近づこうではないか！」と書かれているのです。

あなたは助けを必要としていますか？ 祈りの中で、イエスが受けた苦しみを想いおこしてみましょう。そして信頼をもってイエスに近づいていきましょう。

イエスの苦しみは私達に慰めを与え、イエスの復活は私達に希望を与えてくれます。

2007年4月8日 復活の主日(C年)

【復活のロウソク】

復活したキリストを光に例えています。

ロウソクに書かれているΑ (アルファ) と Ω (オメガ) は、ギリシア語で初めと終わりという意味があります。

また、十字架の香粒は、キリストの5つの傷を表しています。

今年も復活のロウソクに光がともりました。

そして2000年の時を経た今も「わたしは復活し、あなたと共にいる」と。

2007年4月15日 復活節第2主日(C年)

天に昇られたイエスは今日も「永遠の現在形」で、聖書を通して私達に語りかけてくださいます。「あなたに平和あれ」、と。

今日は「神の慈しみの主日」と言われる主日です。この意味は、イエスが実際に行った数々の行いをみれば、簡単に理解することができます。そのようなイエスの優しさと包容力を示す例を見てください。

聖トマスは双子でした。彼はイエスの12人の弟子のうちの一人居ましたが、初めてイエスが復活され姿を現したときには、他の弟子たちとは一緒ではありませんでした。何故その場に居なかったのか、真相は謎で、私達は想像することしかできません。トマスはユダヤ人の国を創ることに大きな望みをかけていました。イエスの十字架上の死はその望みを打ち砕き、失望の中で他の弟子たちと一緒にいたくなかったのではないのでしょうか。そうだとすればそれは人間としてとても普通の反応です。トマスが他の弟子たちのところへ戻ってきた時に、彼は頑固にイエスの復活を信じることを拒みました。「イエスの傷口に実際に触ってみるまでは、私は信じない。」と彼は言ったのです。彼は疑いを持っていたのです。

ニューマン司教は「疑いの無い信仰は死んだ信仰です。」と言っています。私達のほとんどは信仰に疑いを持ったことがあり、しかしこれらの疑いそのものが私達の信仰が実際のところ何であるのか深く熟考させるものなのです。そして信仰は「生きた」ものとなっていきます。疑いは信仰生活にとって良いものなのです。

よく覚えておきましょう。今度はトマスが皆と居る時にイエスが現れました。イエスは、自分を信じなかったトマスを叱ったりはしませんでした。イエスはトマスを、トマスの不信心そのものも含めて、あるがままのトマスを受け入れてくださったのです。

これこそが、「神の慈しみ」です。イエスは、私達が想像できないほど優しく、憐れみ深く、思慮深く、同情的でいてくださるのです。イエスは慈しみなのです。

今週、天に昇られたイエスのことを静かに考える時間、イエスを自分の近くに感じる時間を持ちましょう。(イエスについて疑いをもっている、心配することはありません。)そして、イエスの慈しみ深い優しさを感じてみてください。イエスにあなたの心を捧げ、あなたの心配事をぶつけてみましょう。彼はトマスにそうであったように、あなたにもとても憐れみ深く優しいのです。あなたもイエスの平和を味わうようになるでしょう。

「キリストの平和があなたと共にありますように」

2007年4月22日 復活節第3主日(C年)

イエスが最初の教会のリーダーとして選んだペトロは、福音書において生き生きと描かれています。ペトロは力量がある男でしたが、その欠点も描かれています。彼は一貫して衝動的に行動しがちでした。そしてよく考えずに、間違っただけを行ったりしゃべったりすることがしばしばありました。ペトロは明らかに良く知っているイエスを「知らない」と言ったり彼の弟子ではないなどと、3回もイエスを否定しました。

今日の福音 [\(ヨハネ21:1-19\)](#) は、復活されたイエスが再びペトロに会う情景です。ペトロの3回の否定にあわせて、イエスはペトロに3回「ペトロ、私を愛しますか？」と尋ねました。これは放蕩息子の寓話を、自ら実際の行為で示したものです。

この情景は現代に生きる私達にどのような意味を持っているのでしょうか？ここで、私達を自由にしてくれる、日常にかかわる重要な真実が語られています。

(1) 神は私達一人ひとりの意志の弱さをご存知で、そのうえでなお私達を愛してください。優しい神さまのこの無条件の愛は、慰めと励ましに満ちたキリストの道の真実なのです。この、神様からこんなにも受け入れられているということ、あなたは受け入れることができますか？

(2) このペトロの情景は、もし人が心底悔いたならば、神はまったく、完全に、その罪を許してくれることを示しています。その段階で罪は完全に消え失せます。それゆえ、キリストの道には不健全で悩み深い罪悪感はありません。あるのは、ゆるしに対する感謝の気持ちのみです。

(3) イエスはこの今も生きた声であなた自身に、あなたの名前を呼んで語りかけます。「〇〇〇〇、あなたは私を愛しますか？」この非常に重要な問いに答える前に、イエスが私達に与える無条件の愛の背景について考えなければなりません。その、とてつもなく大きな愛を前提にすることができて初めて、私達はイエスの問いに答えることができるのです。「〇〇〇〇、あなたは私を愛しますか？」

静かな祈りの中で、神であるイエスが私達一人ひとりに与えてくださる無条件の愛について考えてみましょう。そして神様の重要な質問に答えられるよう祈りましょう。イエスは私達に完璧を求めているのではなく、答えを聞きたがっておられるのです。

2007年4月24日 復活節第4主日(C年) [宮内神学生]

ケنز神父様から、「あなたの召命の話をして下さい」と依頼されましたので、今日は神父様のお説教の代わりに、私が自分自身の召命の道について、少しお話をさせていただきます。私は1980年に東京の本郷で生まれました。家族は、母方の相母を除いてみなカトリックの洗礼を受けており、私も生まれて約半年後に、カトリック本郷教会で洗礼を受けました。洗礼名は、アッシジのフランシスコです。

その後、私が1歳になる前に神奈川県藤沢市に家族が引っ越ししてしまいましたので、本郷の家のことも、本郷教会のことも記憶にありません。

教会についてが一番古い記憶は、父に連れられて藤沢教会の日曜日の御ミサに参加したことです。多分、幼稚園に入るか入らないかぐらいの頃だったと思います。当時の藤沢教会ではコロンバン会の神父様たちが司牧をなさっていました。一際強く印象に残っているのは、そのころの主任司祭の祭服姿です。緑色のカズラを着て颯爽と御ミサを献げられるその神父様の姿を見て、子供心に「かっこいいなあ」と思ったのをよく覚えています。また、ちょうど同じ頃、確か母親から、「神父様は、結婚しないでみんなのために働いておられるのよ」と言われ、「すごいなー」と思ったことも記憶に残っています。

今から振り返ると、司祭召命の道を歩きたいと思うようになった原点は、このような司祭への単純な憧れだったのだと思います。

さて、私は、幼稚園と小学校はプロテスタント、中高はカトリックの学校に通いました。特に幼稚園と小学校では、礼拝、聖書の話、お祈りなどが割と日常的にあったように思います。クリスマスには、聖劇などもあって、今でもいい思い出です。

藤沢教会には教会学校に行っていたこともあって、小学校に入ってから4年生が終わる頃までは、ほとんど毎週行っていたと思います。教会学校で何をしていたかはよく覚えていませんが、一つだけ良く覚えていることがあります。

今でもそうかもしれませんが、日曜日の午前中は、子供向けのテレビ番組が多く、小学校でも友達の間でしばしばその話題がでました。ところが、私は教会学校とミサのために日曜日の朝は、教会に行っていたので、見る事が出来ず話題にもついていけませんでした。

ですから、私としては少なくとも教会学校が終わったらミサに出ずに家に帰りたいかったです。それで、あるリーダーに「ミサに出なくていい？」と毎週のように聞いていました。そのリーダーは、私の問いかけに対して、「だめ！」とか「出なさい！」などの厳しい言葉は一言も言いませんでした。そのかわり首を縦に振ったことも一度もありませんでした。今ではそのリーダーに対してとても感謝しています。

小学校5年生から中学受験のために塾に通うことになり、教会には一月か二月に一度、日曜日の夜のミサに、侍者をするために行くだけになりました。中学に入ってから、他の教会のサマーキャンプなどには参加していましたが、藤沢教会との縁は、たまに侍者をするだけになっていました。

そんな私が、また教会に通うようになったのは、ある神父様との出会いがきっかけでした。その神父様は、私の高校の物理の先生でもあった方なのですが、私が高校一年の時に私の学年の担当司祭になられ、あるときカトリック信者の学生を一人ひとり研究室にお呼びになったのです。

私の番になり、少し緊張しながら理科研究室に入っていました。神父様は、私に色々質問なさいましたが、その中の一つが「君はどのくらい教会に行っていますか?」というものでした。私は正直に、「一月か二月に一度、侍者をしに行きます」と答えました。すると、神父様は口を開きこう言われました。

「君ねえ、信者が毎週教会に行くのは当然のことなんです!」。

今思い出してみても、なぜ私とその言葉に心を動かされたのか説明は出来ません。神父様の確信に満ちた言い方に何かを感じたのでしょうか、よくわかりません。とにかくそのことをきっかけにして、私はほとんど毎週日曜日、藤沢教会でのミサに行くようになりました。

その後、高校三年生の時、侍者会のリーダーをして欲しいと頼まれて、引き受けました。それ以来、侍者会の関係で、神父様たちや教会の大人の信者さん達とも接するようになりました。その後大学受験に失敗し一浪しました。浪人時代は、塾に行かずさびしかったこともあって、教会で人に会うのが楽しみで、日曜日には何度も侍者をやったりしていました。大学に入ってから、中高生会のリーダーも兼ねることになり、藤沢教会での活動はますます私の生活の中で大きな部分を占めるようになりました。

それ以前には漠然とした憧れでしかなかった司祭召命を、自分の問題として具体的に考え始めたのは、このころです。きっかけを一つに絞ることは難しいですが、まず思い出すのは、この時期に何人もの魅力的な神父様方と出会う機会をいただいたことです。

その中で特に印象深いのは、当時私が通っていた大学の隣の教会にいらした神父様との出会いです。藤沢教会で紹介していただいた後、連絡がつかないでいたのですが、偶然大学の講義室で再会したのです。それ以降、大学の講義の合間などによくその教会に遊びに行くようになり、色々な行事にも参加するようになりました。それ以外にも、その神父様には挙げればきりが無いほど本当によくしていただきましたし、私が神学校を受験するかどうか迷っているときもずっと励まし続けていただきました。

もう一つ、司祭職を考え始めた原因としては、藤沢教会共同体の存在があります。今でもそうですが、共同体のみなさんのおかげで、藤沢教会は私にとって、とても良い居場所です。そのような教会の雰囲気の中で、いつからか「教会という場所で働きたい」「育ててくださった藤沢教会のみなさんに恩返しできるような道に進みたい」と思うようになったのです。

そうかといって、「司祭になるぞ!」というような力強い決意があったわけではありません。大学4年になっても「司祭職に魅力は感じるし、他になりたいものがあるわけではないけれど、こんな消極的な動機で神学校を受験していいのかな」と思っていました。そんなとき、当時よく相談に行っていた神父様(この方は、先ほど登場した神父様方とはまた別の方ですが)、その方が「僕は、特に否定的な理由がなければ、神学校に入ってもいいと思うよ」とおっしゃって下さったのです。それで私も「ならいいか、もし神様に呼ばれていないなら、いずれ必ずそうだとわかるは

ずだし、もしそうなったら、そのときにまた他の道を探せばいいや」と開き直って神学校の受験を決めたのです。

あれから、もう3年半がたちます。神学校でのカリキュラムも半分が終わりました。1年目、2年目はかなり気持ちが揺れ、神学校を辞めるということが、頭をかすめたことも何度かありました。3年目になると気持ちもだいぶ落ち着いてきて、今に至るまで神学生を続けています。

今までお話した以外にも、本当に多くの方に支えていただき、そのおかげでこれまで歩んでくることができました。素晴らしい出会いをたくさん用意してくださった神様と、出会った方々お1人お1人に心から感謝しています。また、特に祈りと援助によって支えて下さっている皆様、とりわけ一粒会の皆様には感謝しております。

この先、私の召命がどのように進んでいくかは、神様しかご存じないことですが、私自身は、これからも司祭召命の道を歩み続けて行きたいと思えます。どうぞお祈り下さい。

2007年5月13日 復活節第6主日(C年)

堅信①講話要旨 「イエス様は私の主である」

”イエスは私の主である。”これは初代教会の最初の信仰宣言で、今も私たちの信仰の一番根本的なものです。その意味はさきに聖書を通して読むことにより、イエスをだんだんと知ることです。イエスを知ることとイエスと出会うことは同じ意味です。

そのようにイエスと親しくなっていき、したがって私はこのイエスと一緒に自分の人生を歩みたいときめます。そしてイエスに向かって私はあなたの弟子です。、(イエスは私の主であるといった意味と同じ意味です。)

もちろん、すべてを捨てて社会から逃げるという意味ではありません。本当の意味は私達の毎日の家庭生活の中に、家・学校・職場でもそのイエスの道をいれることです。堅信を受ける準備としてイエスともっともっと親しくなしましょう。”イエスは私の主である”という簡単な信仰宣言を良くあじわいましょう。

私達は自分の性格によって、自分のイエスのイメージを描かなければなりません。もちろん、描くための材料は聖書です。私(ケنز神父)の好きな箇所はこれです。

聖書のイエスの心と今のイエスの心はまったく、同じです。

皆さん、自分の性格によって自分のイエスを描きましょう。そのイエスに心を開いて、すべてをゆだねその道を歩みましょう。

2007年5月20日 復活節第6主日(C年)

堅信②講話要旨 「父なる神様」

30年前に、私は聖地を巡礼しました。エリコで私は一つの経験をしました。その近所の子供は発掘の現場の丘にのぼって、上からお父さんを呼びました。使った

言葉は「アッパ、アッパ」でした。お父さんは、丘の上の子供を見て、微笑み、はげましました。また、子供は急にすべり台からおりてくるように、降りてきて「アッパ、アッパ」ともう一度呼んで、お父さんの腕にとびついて、抱かれました。本当に楽しい暖かい雰囲気の間でした。イエス様は2千年前に同じ「アッパ」とい呼び方をつかいました。というのは、イエスは「アッパ」父である神様について何回も何回も次のように教えられました。

私たちの神様は罰する方、厳しい方、恐ろしい方、ではないかえってやさしいお父さんである神様です。したがって、私たちは愛された子供です。イエス様はそのやさしい教えのために、その時代の小さい子供の言葉「アッパ」を使用しました。(現在の「パパ」と同じ使い方)非常に親しい暖かい言葉です。イエス様のこの言葉の使い方の裏には、大事な教えの意味が含まれています。というのは、私たちを弱い子供として受け入れて下さる神様は非常にやさしい方、そして私たちを大事に下さる方、いつも私たちを深く愛する子供としてやさしく見守って下さる方です。

したがって、そのようなやさしい「アッパ」、神様に対する私たちの答えは、やはり信頼です。イエス様の時代の大勢の人々にとっては神様は罰する神、厳しい神、恐ろしい神でした。人間は恐れを持って、厳しい掟を守りました。神様は冷たい速い方だと思っていました。厳しい尊敬だけを当時の人々は持っていました。

皆さん、私たちはイエス様のやさしい教えを受け入れたでしょうか。まだ、旧約時代の信者でしょうか。神様は「アッパ」父だ、これはイエス様の慰めの訪れ、喜ばしい知らせです。この教えは私たちへの大きな慰めであると同時に、大きなチャレンジをも求めます。そのチャレンジは神様のやさしさに信頼することなのです。堅信を受けることとはこのチャレンジに答えることです。

★「慈しみ深い神よ、あなたの御手にわたしのすべてを委ねます。」★

今週中のお勧め。この聖書の箇所を開いて祈ってください。

1. イザヤ書(43:1-5) 私たちを造られた主、神は今、こう言われる。
恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。私はあなたの名前を呼ぶ。私は主、あなたの神、あなたの救い主。わたしの目にあなたは価値高く、貴く、私は貴方を愛している。恐れるな、私は貴方とともにいる。
2. ローマ書(8:15) 聖霊によって、私たちは「アッパ」父よと呼ぶのです。この聖霊こそは、父なる神の子供であることを私たちに悟らせて下さいます。
3. マルコ書(14:36) イエス様の苦しみの時の祈りです。「アッパ」父よ、貴方は何でもお出来になります。この苦しみを私から取りさって下さい。しかし、私がねがうことではなく、御心にかなうことが行われますように、
4. イザヤ書(66:13) 神はこう言われる。「母がその子を慰めるように、私はあなた達を慰める。」
5. ルカ書(15:11-24) やさしいお父さんと放蕩息子のたとえ話。

2007年5月27日 聖霊降臨第の主日(C年)

堅信③講話要旨 「慰め助け主である聖霊」

皆さんは自分の才能、自分のファイト、自分の努力を一生懸命つくして、それぞれ自分の人生の道を歩んでいるでしょう。しかし、自分の身体や精神に疲れがでると思います。皆さんは自分の力だけで、この人生の道を歩むことはできません。

特に信仰の道を自分の力だけで歩むことは不可能です。イエス様の教えられた道を歩むための第一歩は、自分ができないこと、自分の弱さを認めることです。それを正直に認めることは信仰生活のために絶対必要で、神様からの手助けが必要なのです。一般の人生の旅路のためにも、また、もちろん信仰生活の道でも、神様と一緒に人生を歩むことによって、本当の安らぎ、平和、安心、喜び、生きがいを与えられます。

優しい神様は、喜んで私たちが弱さを認めたことに答えて、その助け、慰めを豊かにお与えくださいます。結局、神様は慰め主、助け主である聖霊を送ってくださるのです。堅信の秘跡というのは、この助け主である聖霊を受ける秘跡です。ですから、堅信の秘跡を受ける準備として、自分の人間的なみじめさ、自分の力だけではこの人生の道を歩めないことを正直に認めましょう。したがって、「助け主である聖霊よ来てください」と心から祈りましょう。「聖霊への祈り」は9世紀からの長い伝統があります。ゆっくり、噛みしめて祈りましょう。

そして、堅信の準備のために次の聖書の個所を調べて祈りましょう。

ルカ 11 章 9-13

ローマの信徒への手紙 8 章 15-17 26-27

ガラテヤの層徒への手紙 5 章 16-26

使徒言行録 2 章 1-4

聖霊への祈り

聖霊、来てください。

あなたの光の輝きで、わたしたちを照らしてください。

貧しい人の父、心の光、証の力を注ぐ方。

やさしい心の友、さわやかな憩い、

ゆるぐことのないよりどころ。

苦しむときの励まし、暑さのやすらぎ、

うれしいときの慰め。

恵みあふれる光、信じる者の心を満たす光。

あなたの助けがなければ、すべてははかなく消えてゆき、

だれも清く生きてはゆけない。

汚れたものを清め、かわきをうるおし、

受けた痛手をいやす方。

かたい心をやわらげ、冷たさを暖め、

乱れた心をただす方。

あなたのことばを信じて、

より頼む者に尊い力を授ける方。

あなたはわたしの支え。

恵みの力で、救いの道を歩み続け、

終わりなく喜ぶことができますように。

アーメン。

2007年6月3日 三位一体の主日(C年)

堅信④講話要旨 「ミサにあずかる心がけについて」

私達の社会の雰囲気は 物質万能主義です。イエス様の価値観とは全く逆です。

キリスト教信者にとって あるときは寂しい気持ちを持つでしょう。私達が信者としてその逆を歩む勇気と励ましと力づけは やはり ごミサとご聖体拝領なのです。

ごミサは いくつかの部分に分かれていて いろいろな立場から説明することができます。

最初のごミサは 最後の晩餐でした。その時も 今も二つの部分があります。

第一は聖書朗読です。第二は奉獻の部分です。教会の教えは「聖書が教会で読まれる時は キリスト自身が語るのである」 簡単に言えば 聖書朗読を通して イエスご自身が 私達に話しかけ 天国から人生の道に対して 大事なメッセージを 伝えてくださいます。

ある時はそのメッセージは慰めであり ある時はチャレンジです。ごミサにあずかるときは 敏感な耳を持って聞く態度、期待の心をもつようにしましょう。

例えば日曜日の朝起きて 「今日はイエス様は 私に何を言われるのでしょうか」

良く聞いたら何らかの響きを感じると思います。その響きは 神様からのメッセージです。人によって 生活の状態によって響きが違います。意義あるごミサに授かるために そのような敏感な心の耳を作りましょう。

続いて奉獻の部分を考えましょう。捧げる心はキーワードです。イエス様は私達の救いのために十字架の上で ご自分の命を お捧げになりました。私達はごミサの中で イエス様と一致して 自分の毎日の生活 日々の出来事を 父なる神様のみ手に捧げます。喜びも 悩みも 毎日の仕事も つまり自分のすべてを捧げます。

聖体拝領のとき、人生の道を元気良く歩むために イエス様ご自身が 私達の心にお入りになります。食べ物の形でのご聖体は 心の力づけ、心の栄養の意味です。聖体拝領後 友達であるイエスさまと親しく話し合ひましょう。最後の点ですが、私達は聖書朗読を聞くことも 自分を捧げることも 全部兄弟姉妹として一緒にします。この一致の心を持つなら ごミサは励ましと力になると思います。

このように ごミサにあずかって 自分の家に帰って 自分の小さな社会に再び入って 主の平和を分かち合ひましょう。

今週のお勧め。この聖書の箇所を開いて祈ってください。

①マタイ書 (26 : 26-29)

②ヨハネ書 (13 : 1-15)

③ヨハネ書 (15 : 1-17)

2007年6月10日 キリストの聖体(C年)

堅信⑤講話要旨 「聖体拝領と祈りについて」

東海道線 国府駅ー鴨宮駅間の精米所の壁の上の大きな看板に[米は力だ]と書いてあります。お米は日本人の主食でこの食べ物を通して 体の栄養と力と元気を頂いています。

2000年前のイエス様の国ではパンが主食でした。同じ考えで「パンは力だ」と考えられていました。この背景の中でイエス様はご聖体の秘跡のためにパンをお選びになり「最後の晩餐で」と言うのは最初のごミサでパンをとり「これは私の体です。」と仰せになりました。これは私自身ですと言う意味です。

現代のごミサの中でただのパンは 聖変化の後 神様の力のお陰でイエス様自身になります。このご聖体は私達の人生の旅路の中で 心の栄養になって霊的な力を与えてくださいます。

実は信仰の元気さのため ご聖体は絶対に必要です。

私達のご聖体の中におられるイエス様を頂くことで 深い一致・親しい交わり・暖かい眼差しを経験します。イエス様は人生の旅路の親しい同伴者となって 素晴らしい支えになります。

ご聖体を頂いた後の時間をよく使い イエス様のみ前に自分の心の凡てをさらけ出し 親しく話し合ひましょう。これは祈りです。

16世紀の祈りの博士 アビラの聖テレジアは次の様に書きました。「イエスは一人々々に対して深く暖かい友情を持っています。ですから友達同志の遠慮のない話し合いは 祈りになります。」

祈りの時イエス様のお望みは 私の無防備な心ありのままの心です。逆にさまたげは自分のこころを祈りの前に着飾ること ある時はイエス様に対する 丁寧すぎる態度です。

イエス様は私達一人々々に 今日生きている声で 聖書を通して仰せられます。

「私は貴方を友と呼ぶ 私にとどまりなさい。」ヨハネ・15章

イエス様の祈りへの招きは次のようです。

「疲れた者・重荷を負う者はだれでも 私の許にきなさい 休ませてあげよう。」マタイ・11章

皆さん繰り返し申しますが ご聖体を頂いた後は 特別の祈りの時間を上手に使いましょう。

教会の習慣の中にご聖体訪問があります。ごミサ以外に聖堂に入りせいひつの中のイエス様と一緒に過ごす習慣です。(赤いランプはイエス様がいらっしゃる するしです。)

友達イエス様への挨拶・相談・友情を味わう時間です。

勿論私達は聖体拝領・聖体訪問以外にもイエス様と親しく話し合うことが出来ます。

例えば自分の家で静かな一時をつくる・電車の中で・散歩の中で・仕事の中で・・・この親しい話し合いの祈りの材料は 今自分の心の中のことです。

喜び・悩み・苦しみ、いつもありのまま 友達イエス様と話し合ひましょう。

最後に聖体拝領の大切な点

私達共同体のみんなは 同じイエス様を分かち合いますから 深い一致があります。その一致の源は イエス様ご自身です。聖パウロは次のように書きました。

「私達が裂くパンは キリストの体に与かる事です。パンは一つだから私達は大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」1コリント・10章17

その一致は日本の諺のように“同じ釜の飯を食う”ことです。そのため私達が 最後の晩餐のイエス様の心を持つことが大事だと思います。いわゆる(洗足)のころなのです。

私達もイエス様と一緒に言ひましょう。『私は仕えられるためではなく・仕えるために来た』

本当にご聖体を頂く私達は恵まれた者です。“イエスの食卓に招かれた者は幸い”

堅信の準備のために次の個所を調べて祈りましょう。

①ヨハネ・15章 1～17

②ヨハネ・13章 1～15

③マタイ・11章 25～30

2007年6月17日 年間第11主日(C年)

堅信⑥講話要旨 「堅信式について」

今日は堅信式そのものについて、語りたいと思います。堅信の秘跡の中に二つの働きがあります。一つは神様からです。助け主である聖霊、慰め主である聖霊は、私たちの上にくだります。もう一つは、弘たち信者からです。社会の中でイエス様の証し人になることです。堅信の移跡を授ける人は、普通は司教様です。堅信は洗礼のつづきです。堅信の秘跡の中には三つのシンボルがあります。第一は按手、第二は言葉、第三は聖香油です。聖書の中での按手の意味は「貴方は神様から特別な使命をいただきます。その使命を果たすために必要な力もいただきます。」 司教様が按手する時に、この言葉を使います。

全能の神、主イエス・キリストの父よ、あなたは水と聖霊によって

この人びとに新しいいのちを与え、罪から解放して下さいました。

今この人々の上に、助け主である聖霊を送り、知恵と理解、判断と勇気、神を知る恵み、神を愛し敬う心をお与えください。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

〇〇〇〇、父のたまものである聖霊のしるしを受けなさい。アーメン
主の平和。

第三のシンボルは聖香油です。司教様が聖週間の荘厳な式の中で、この油を祝別します。オリーブ油に芳しい香りのあるバラの油をいれます。私たちは、イエス様から芳しい香りのある恵みをいただきました。というのは信仰の喜びです。私たちは社会に入って芳しい香りが漂う社会をつくりましょう。何かの喜び、何かの光を分かち合いましょ。これは社会のなかでのイエス様の証し人といいます。具体的に言えば、証し人の行いは、人に暖かい態度を示すこと、励まし慰めの言葉を言う事です。人の身分に応じて、イエス様の証し人となりましょう。そして信仰の喜びを分かち合いましょ。

私たちはこの世で一番恵まれたものです。神様の愛を知っていますから、その恵みの偉大さを理解して感謝して分かち合いましょ。受堅者のために一番大事な準備は祈りです。

慰め主、助け主である聖霊、私の上に来て下さい！

2007年6月24日 洗礼者聖ヨハネの誕生(C年)

保土ヶ谷教会の皆さん、おはようございます。保土ヶ谷教会に来るのは3年ぶりです。今日は堅信式がありますが、今回保土ヶ谷教会で堅信を受けられる方は48人とのことで驚きましたが、喜ばしく思います。

さて、今日の福音（ルカ 1・57-66）では洗者ヨハネの母、エリザベトが出てきます。このエリザベトの夫、ザカリアの前に大天使ガブリエルが出現し、神のご意思のもとにヨハネが生まれてくることを告げると、ザカリアは「どういうことで私はそれを知ることができましようか？」と反駁しました。一方イエスの母マリアは、同じように天使よりイエスの降誕を告げられた時、「私は主のはしためです。あなたのみことば通りとなりますように。」と答え、神への絶対的な信頼を示されました。ザカリアが主のご計画の成就について証拠を求めたのに対して、マリアはそのご計画について「私は何ができるのでしょうか。」と尋ねたのです。いわばザカリアは神に対して、やや傍観者的であったのに対して、マリアは完全に神を信じ自分のこととしてかかわっていくことを示されたのです。

このマリアの信仰は、私達、とりわけ今日堅信を受けられる方々にとって良いお手本となると思います。洗礼・堅信という大きな恵みをいただいて、「それで実際、どのようになっていくのですか？」と疑問に思うよりも、マリアが示された信仰をお手本に、その恵みを戴いて私達が何ができるかということを考えていると思います。

カトリックの信者になることで、イエスの教えについてカトリック教会が2,000年かけて形成してきた体系的な理解のしかたを得ることができます。しかし、これと等しく重要で、また簡単にすぐ行えることとして、イエスが自ら行い示した隣人への愛の実行があります。私達はイエスが望まれているように十分な愛を隣人に示しているのでしょうか。

ところで聖母マリアは、「恵み溢れる聖マリア (Ave Maria, gratia plena)」と私達が祈るように、イエスを宿すという神からの恵みが満ちみてる方でした。しかし実際の人生では、普通の子とは異なるイエスに戸惑い、そしてそのわが子を十字架に磔にされて失うこととなります。それでも、聖マリアは最も神の恩寵に満ち溢れた女性なのです。

ところで、話は飛びますが私はよく10円玉の話をしつづけます。あちこちで話しているのでも皆さんの中にも聞いたことがある方もいるかもしれません。ある養護学校での話ですが、子供たちの中には家庭の事情などで普段は親元を離れ寄宿している子供たちもいます。社会で生きて行くためにある日先生が子供たちに、お金の使い方を教えました。一通り教えた後で「一番価値がある硬貨はどれですか？」と聞いたところ、ある女の子が「10円です。」と答えたそうです。普段から理解力のあるその子がわからないようではほかの子供もわかっていないだろうともう一度説明して再度その女の子に尋ねるとまた、「10円です。」不思議に思った先生が、「どうして？」と聞いてみるとその子はこう答えたそうです。「その10円玉で、お母さんと話せるからです。」その女の子も寄宿していて、母親ともたまにしか会えないのですが、毎日一日の終わりに公衆電話でお母さんと話すのを楽しみにしていたそうです。私達は500円、100円、50円、10円、5円、1円と、一面的な価値基準だけでものごとを序列づけ、判断してはいないのでしょうか。私達にも、実は、100円よりも、100万円よりも、1億円よりも貴重な、10円玉があるのではないのでしょうか。

イエスが示された愛の教えを実践するには、神様の助け、恵みが必要です。今日の堅信式にあたっては、このような恵みを今いただけると自覚し、イエスの示された道を歩む糧といたしましょう。

2007年7月1日 年間第13主日(C年)

ルカによる福音書の9章51節から19章28節までは「旅の主題」と呼ばれています。イエスはエルサレムを目指して旅立ったのですが、ルカはこの旅を、私達が人生の旅をおくるうえでの手本として見ています。

私達キリスト教徒は人生の道をイエスとともに歩いていこうと、イエスからの呼びかけを受け取っています。皆さん忘れないようにいたしましょう、私達は人生を決して一人で生きているのではなく、力とお導きを与えてくださるイエスとともに人生を歩んでいるのです。今日読まれた詩篇では「神はわたしのそばにおられ、わたしはけっしてゆるがない。」と語っています。

今日の福音ではイエスに呼ばれた3人の話が出てきます。この3人の名前は示されていません。むしろこの3人は私達自身を現すとえと考えた方がよいでしょう。

最初の人「はい、イエス様、私はあなたに従います。」と言いました。イエスはその人（そして私達に）、イエスのように私達も苦しみと時によっては寂しさに直面することを警告しています。

二番目の人は「はい、イエス様、私の父が死んでから、私はあなたに従います。」と言いました。彼の父親は健康で、死んでしまうのは5年10年20年あるいは30年先の話でしょう。言い換えればその人はイエスにすぐについていけない口実に父親を使ったのです。こんにち、私達も「今は忙しすぎてイエスに従うことができません。」、あるいは「終日働いていて時間がありません。」と言うかもしれません。しかし、これは「遅延戦術」のようなものです。

三番目の人も従わない言い訳を言いました。この人は自分の過去の人生を振り返り、イエスに完全に自らを賭けるということはしませんでした。別の言葉で言えば、イエスに従うということは、イエスの御手に私達の未来をゆだねるということを意味します。イエスが「恐れるな、わたしはあなたと共にいる。」と言う時、私達はイエスを信じなければなりません。

イエスに従い、イエスの御手に私達の人生をゆだねることにより、私達の人生に真の意味と味わいがもたらされます。これと同時に、私達はより良い親、職業人、友人等になることができます。なぜならば「神はわたしのそばにおられ、わたしはけっしてゆるがない。」からです

2007年7月15日 年間第15主日(C年)

この拙文を読んでいただく前に、有名な「良きサマリア人」と呼ばれるイエスのたとえ話（[ルカ10：25-37](#)）を、新たな気持ちで読んでいただきたいと思えます。

4年前、医療福祉の方々のために私は「キリスト教」という広いタイトルの講座を持っておりました。講座終了試験の中で、「現代の日本の中で、良きサマリア人のたとえ話はどのような意味をもつのでしょうか」という問いがありました。その中での、ある回答をご紹介します。皆さんそれぞれ、ご自身の回答はどのようなものとなるのでしょうか。イエスは私達一人ひとりに「行って私と同じように（愛の行為を）行いなさい」と言っておられます。なんという挑戦でありましょう。では、その学生さんの回答を見てみましょう。

【 高校の頃、私は厚い眼鏡をかけていて、緊張するとひどくどもってしまいました。『出る杭は打たれる』の諺どおり、私はイジメにあってしまいました。

ある日、私が答えを間違えると、数学の教師は私のどもりを真似して私をクラスの笑い者にしました。昼休みに入っても、級友たちはその真似を続けました。

私は野球場の隅のベンチに一人座り、死にたい気持ちでした。

担任の先生は私やイジメには無関心で、級長も忙しくて構ってられない振りをしていました。私は絶望的に孤独で、ひどく傷ついていました。

しかし在日3世の在日朝鮮人の級友がやってきて静かに私の傍らに座りました。彼は5分も何も言わずにそばに居続け、そして口を開きました。

「どんな気持ちか、僕はわかるよ。でも、頑張る。君は立派だし、良い人だと思うよ。つらいけれど、僕達はこんなことで、他の人のつらさもわかってあげられるようになると思う。」

その在日の級友は私の心の傷を癒してくれただけではありません。私が高齢者、虐待児童、心身障害者の方々を支援する医療福祉の道を選んだのも、結局彼がその選択の種をまいたことになるのです。】

2007年7月22日 年間第16主日(C年)

良きサマリア人のたとえ話は、祈りだけ（例：ユダヤ僧侶）では十分ではなく、隣人への愛の実行も必要である、ということでした。今日の聖書（ルカ10：29-42）に出てくるマルタとマリアの話は、隣人への愛の実行だけ（例：マルタ）でも十分でなく、祈りも必要であるということです。これら二つのたとえ話は対となってバランスするものです。

ヨハネ11章5節では「イエスはマルタとその妹マリア、そしてラザロを愛された。」とあるように、かれらはイエスの友人であり実際イエスは彼らを好きでした。友人としてイエスはマルタに優しく「マルタさん、マルタさん、あなたは仕事に追われ忙し過ぎます。」と言ったのです。（マルタの名前を2回呼んだのは、親しさの表れです。）

個人的に私は自分自身がマルタに似ているような気がして彼女に共感してしまいます。ですから、イエスの優しい諭しは私自身に向けられているものと思わずにいられません。そもそも現在の日本にいる私達すべてがマルタのようではありませんか？ 私達が暮らしている社会の雰囲気まさに忙しさに追われるものであるからこそ、今日の福音のマリアのようにイエスの足元に座りイエスの言葉に耳を傾ける必要があるのです。つまり、静かな環境の中で祈る機会が必要なのです。ここでいう祈りとは、特別な準備や祝福が必要なものではありません。ただ座ってイエスからの愛と友情を味わうだけで良いのです。

イエスは「私はあなたの名前を呼ぶ。私はあなたを友と呼ぶ。」と言ってくくださる神なのです。この愛と友情こそが祈りの基礎となるものです。

今週、毎日3分間静かなお祈りをしてみてください。私のやりかたは、準備として部屋にろうソクを灯し、体の緊張をときほぐし（とりわけ固くしまったアゴの筋肉をほぐし）、リラックスします。そしてイエスが私の名前を呼ぶことをイメージします。わたしはイエスの私への友情を感じる事ができ、そしてイエスがあるがま

まの私を受け入れてくださることを感謝するのです（平穏な日の祈りもあれば、怒涛の日もあります）。

私はマルタが包丁と料理壺をわきに置き、マリア、ラザロとともに静かにイエスの話を聴く様子を想像することが好きです。そしてその後マルタはもっと上手に料理できるようになっただろうと思うのです。

2007年7月29日 年間第17主日(C年)

時として、私は祈りたくても、うまくいかないことがあります。そんな時私は、人間である自分の努力だけで祈りができると思っていた誤りに気がつくのです。神に祈ることさえ、私は神の助けが必要なのです。そこで私は、今日の福音に出てくる言葉、「イエスよ、私にも祈りを教えてください。」という言葉を使います。

イエスの弟子が同じ言葉を発した時、イエスは私達が「主の祈り」と呼ぶ祈りをお教えになりました。この中で最も大切な言葉は、最初の「我らの父よ」と呼びかける言葉です。この言葉こそが、キリスト教徒にとって祈りとは何かを示しているのです。この言葉は、真に愛されている子供と、その子をありのままに受け入れる父親との間にある優しく暖かい関係を示しています。イエス自身は神に祈るときに、同様に、小さな子供が使う言葉「アッパ（おとうちゃん）」という言葉を使いました。これは完全な愛と信頼を意味しています。

イエスは我々に神に対しては子供のように信頼を持って神に願い事をしなさいと言っています。「求めよ、されば与えられん。」神は私達が真に幸せになってほしいとのみ願っています。神は我々の不幸を全く望んでいません。（これは、今日のたとえ話のように、父親が子供に蛇やさそりを与えないことと一緒にです。）

今日の第一朗読で、神の友人でもあったアブラハムが、神に対して「あえて」お願いするところが出ています。その言葉「あえて」は重要です。我々も、「あえて」天にまします私達の主に、子供のように願い出しましょう。イエスは重要な何かを教えてください。私達は天の神に、自信を持って恐れなく、子供のように願い出ることができるのです。私達も、ゲッセマネの園でのイエスのように「この願いをあなたにゆだねます。」と私達の願いをしましょう。

私自身としては次の2種類のお願いがあると思っています。

第一の願いは、とりあえずすぐに必要なもの、健康、試験、問題解決などです。第二の願いは、心の底からのもの、自分自身の内面から湧き上がる憧れです。この憧れが私の祈りとなっています。主よ、私達に祈りをお教えてください。

2007年8月5日 年間第18主日(C年)

皆さんは昔「ブッシュマン」という映画があったのを覚えていらっしゃいますか？その映画はアフリカのカラハリ砂漠に住む遊牧民の家族が主人公の映画でした。そのシリーズ3作目で、カラハリ遊牧民がサルを捕獲する巧妙なワナが出てきました。ブッシュマンは穴のあいた箱のようなものをつくり、その穴は丁度サルが手を突っ込むことができるギリギリの大きさにしておいたのです。そして箱の中にはお

いしそうな香りがたつ、サルの大好物の木の实を入れておいたのです。サルはその匂いをかぎつけ、手を入れて木の实を取ろうとします。しかし手のひらを握りしめたままでは穴から手を出すことができません。ここでサルは選択をせまられます。

1) 大好きな木の实をあきらめ、自由の身になるか、2) 木の实をあきらめず、箱に捕らわれたままでいるか。多くのサルは後者の選択だったのです。これは私達にとって示唆深いことです。

私達も物質的な物ごとの捕らわれ人となっていないでしょうか。暮らしをうまくやっていくことばかりに重きがおかれて、神と祈りについておろそかになっていないでしょうか。

物質的な物ごとそのものが悪いということではありません。しかし時として私達はそれにそっくり飲み込まれてしまい、神と祈りを忘れてしまいます。ヘンリー・ノーウェンという方が「両手を広げて」という美しい祈りの本を書いています。両手を広げて物質的な物事を解き放してしましましょう、そして神があなたに愛を与えられるようにしましましょう。

聖アウグスチヌスは5世紀に著書「告白」において次のように書いています。

「わが主よ、あなたは私をあなたのためにお作りになりました。私の心はあなたのところでしか憩うことができません。」

2007年8月26日 年間第21主日(C年)

神は私達を神の子供として、全くわけへだてなく例外なく愛してくださいます。神のその愛を、神によって教えてもらえる人もいます。そのように教えてもらえることは、大変な「特権」とも言えますが、ここで気をつけたいことは、そのように神の愛を知ってクリスチャンとなったとしても、別に神のエリートとなったわけではない、ということです。イエスはそのような考えを強く否定しています。聖書は神によるそのような「召しだし」や「選ばれた人々」という言葉を、独特な意味で使っています。私達は神によって、他の人々に奉仕するために、召しだされ、選ばれているのです。クリスチャンであるからといって、そうでない人々より優れているわけではありません。

私自身の経験談なのですが、クリスチャン人口が1%未満の日本に来てみて、神による召し出しのありがたさを改めて感じることができました。信仰は、わたくしの日常に味わいと意味づけを与え続けています。「恐れるな、私はあなたと共にいる」と言ってくれる神がいるということは、私にとって素晴らしい支え・希望となっています。

ですので、信仰をお持ちのすべての人々に対して、私は聖書に基づいた次の取り組みを行なってみていただきたいと考えています。

(1) ご自身がいかに恵まれているかということであらためて認識していただき、神にそれを気付かせていただいたことに感謝します。信仰は自ら勝ち得たものでなく、自分が神を信じていることは、全く神のおかげであることに気付くことが重要です。

(2) このことについて、神との親しい祈りの中で、神に感謝いたしまししょう。

(3) この感謝を、他の人々とわかちあいましょう。やりかたは、状況に応じて様々です。他人への感謝、励まし、思慮深い優しさ、温かい笑顔、そして時として赦しなどです。

これが聖書でいう”狭き門をくぐる”ということで、謙虚な心で、自分自身の好むことがらを優先しないということです。自己中心的で傲慢な人々は、自分達が（クリスチャンであるので）エリートとして広い門をくぐる権利があると錯覚することがあるかもしれません。しかし、それは間違いなのです。

2007年9月9日 年間第23主日(C年)

本日、保土ヶ谷教会では敬老の日のお祝いをいたしました。敬老の日にあたって、私の説教のかわりに、故ヘルマン・ホイヴルス神父様（イエズス会・上智大）による有名な祈りをご紹介しますと思います。

最上のわざ

この世の最上のわざは何？

楽しい心で年をとり、働きたいけれども休み、
しゃべりたいけれども黙り、失望しそうな時に希望し、
従順に、平静に、おのれの十字架をになうー。
若者が元気いっぱい神の道を歩むのを見てもねたまず
人の為に働くよりも、謙虚に人の世話になり、
弱って、もはや人の為にやくだたずとも、
親切で柔和であること、
老いの重荷は神の賜物。

古びた心に、これで最後のみがきをかける。

まことの故郷へ行くために。

おのれをこの世に、つなぐくさを

少しずつはずしていくのは、真にえらい仕事。

こうして何も出来なくなれば、それを謙遜に承諾するのだ。

神は最後に一番よい仕事を残してくださる。

”それは祈りだ”

手は何も出来ない。けれども最後まで合掌できる。

愛するすべての人のうえに、神の恵みを求める為に。

すべてをなし終えたら、臨終に神の声をきくだろう。

『来よ、わが友よ、

われ なんじをみすてじ』と

(ルマン・ホイヴルス『人生の秋に』より)

この祈りは日本にてよく愛されており、ゆったりしたと味わい深いものです。皆様も是非お祈りください。

2007年9月16日 年間第24主日(C年)

私達は神の愛、憐れみ、慈しみ、優しさ、そして柔和を聖書で読んだり聴いたりします。しかし問題は、これらの意味を私達はしっかり心で捉えているでしょうか。そうするためには、特別な、静かな時間が必要です。というのも、心からこれらを理解することは、人間の努力と勉強だけでは不可能であり、神からの純粋な賜

物であるからなのです。この賜物により、私達はまったく新しい人間になることができます。

イエスの時代のファリサイ人は神について極めて厳しい考えを持つ人々でした。神は、掟の神であり、掟を破る者は神に罰せられなければならないのです。イエスはそのような考え方に真っ向から反対しました。例えば、ルカ15章ではイエスは三つのたとえ話をしています。(1) 見失った羊、(2) 無くしたコイン、そして(3) 放蕩息子の話です。

羊飼いは一匹のために99匹を置いて探しにいたのです！これは神にとっては、どんな人でも、一人ひとりとても貴重であり、愛している、ということです。

持っている10枚のコインのうち1枚を無くした主婦が、徹底的に探し、ようやくそれを見つけて大喜びする話は、神のイメージを語っています。私達の神は、大喜びする神なのです。厳しく罰する神ではなく、大喜びする神、そんな私達の神をイメージしてみましょう。

放蕩息子のたとえ話では、息子の罪よりも、父親の優しさ、慈悲、愛が描かれています。これこそが私達の神です。

昨日読んだ、素晴らしい一節をご紹介します。「いつくしみ、愛、そして憐れみは、神のうわべではなく、神そのもの、神の本質なのです。」私にとって、この一節は非常にさまざまな思いをかきたてるものでした。

皆さん、今週はゆっくりと祈りの心を持って、ルカ15章を読んでみましょう。そして静かに座って、神の私達への個人的な愛を味わってみましょう。

2007年9月23日 年間第25主日(C年)

イエスの教えには、私たちへの慰めと私たちに課せられた挑戦が見事にバランスしています。今日のイエスの教えは、挑戦のほうです！イエスはこうおっしゃいます。「あなたの人生、どのように歩むかあなたが自由に決めることができます。神様かお金か、どちらを選びますか？両方に仕えることはできないのです。」従って、私たちも自分自身に尋ねてみましょう。「私たちの人生において何を優先していくのでしょうか？ モノ？ 仕事？ カネ儲け？ 快樂？ それとも神様？ もしイエスがたどった道を私たちも選ぶのであれば、そのためにとても大事だと私が思うことを、ちょっと紹介させていただきます。

(1) 各人それぞれ、人間としてのはかなさを認識いたしましょう。自分自身の人生を、人間一個人の力だけで完全に切りまわしていくことはできません。私たちは神の助けが必要なのです。父として、母として、学生として、働く者として、あるいはリタイアした者として、私たち一人ひとりには神への渴望があるのです。

(2) 日々の祈り。朝起きた時に神に一日の加護と導きを求めましょう。一日の中で、ちょっとでいいから一人静かな時間をつくり、聖書を開きその言葉の自分への意味を考えましょう。

(3) 隣人への優しさ。私たちは神によって特に選ばれ恵まれています、その目的は隣人とわかちあうためです。この世の中の貧しい人たちに対して、私たちは私たちの能力に応じて何らかの手助けをしているでしょうか。

(4) 私たち自身が苦しみに直面する時、私たちは、私たちのために苦しんでくださったイエスとしっかり連帯しているでしょうか。

この四つの点を実行に移すことにより、誰もが、新しい味わいのある人生を送ることができるようになると思います。ぜひ実行してみてください。

2007年9月30日 年間第26主日(C年)

今日の福音に関して、現代風のたとえ話です。

ある猛暑の日、エアコンがよくきいた社用車で、ある会社の社長さんが自分のオフィスに到着しました。オフィスは広く現代的で、天井まで届くガラス窓の向こうには、庭木や草花が芝生に映える美しい庭が続いています。室内は23度に冷房されており、彼はスーツとネクタイできちんとしています。一方、外は32度の猛暑の日です。

10時になり、庭を眺めながらお茶を飲んでいると、日雇いの草刈りが見えました。良く働くようなら4、5日雇ってみようと、今日のところはお試しで呼んでみた日雇いでした。しかし社長さんが見る限り、日雇いは雑草取りをものすごくゆっくりやっているように見えます。社長さんは独り言をいいました。「こいつら日雇いの連中ときたら、いつもこれだ。グズでいい加減で、頼りにならない。」

3時になり、社長さんは再び外の庭の様子を見てみました。日雇いの仕事の様子は朝と同じか、もしくはさらにのんびりとしていました。いい加減カッときた社長さんは日雇いを叱ろうと、庭へ通じるドアをあけて外へ飛び出しました。一步出たとたん、空調のきいた23度の世界から、蒸し暑い32度の世界に入った社長さんは、窯の中に飛び込んだようなショックを受けました。とたんに汗が吹き出し、力が萎えていくのがわかります。実際に外に出てみるまで、日雇いがどのような状況で働いていたか、全くわかっていなかったのです。外に出てみてはじめて、日雇いの状況と気持ちを彼は理解できたのです。

さて私たちは、ホームレスであること、日雇いであること、悲しく孤独であること、希望を失っていること、貧困にあえぐこと、などが実際にどのようなものであるか、わかっているでしょうか。私たち他人の状況や気持ちを思いやろうと努力するよりも、むしろ、利己主義的な居心地の良い自分の世界に安住しているのでしょうか？ 今日の福音 ([ルカ 16 : 19-31](#)) にでてくるラザロが、私たち一人一人の家の戸口の外にもたたずんでいるのが見えるはずですが。他者の気持ちをわかるといふことは、優しくなれることの第一歩です。「あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。」 (マタイ 5 : 7)

2007年10月7日 年間第27主日(C年)

紀元前6世紀、ハバクにとって物事はすべて最悪の状況でした。彼の国は戦いに敗れ、敵の軍勢に占領されてしまいました。ハバクは神に見捨てられ空虚な思いをかみしめていました。あなたはこのような思いをしたことはありませんか？ この時、ハバクは礼儀も何もかなぐり捨てて、心の思いをそのまま神にぶつけています。神に対してハバクは泣き叫びました。「なぜ、なぜ、なぜあなたはわたしを見捨てたのですか、神よ！」 これは、わたしたちが切羽詰まったときの、祈りの手本です。このように祈ることは、神に対して失礼にはなりません。それどころか、正直な心のそこからの祈りであり、まさに神が欲しているものなのです。

強い言葉を用いて神に叫ぶことは、聖書においてしばしば描かれています。ハンナ、エレミアもそうでした。イエスは詩篇22章を「神よ、神よ、なぜ私をお忘れになったのですか？」と叫び祈っています。この祈りは空虚な心から発せられていますが、神の私たち一人一人への無条件の愛、堅固な基礎によってたつものです。しかし、時として私たちはこのような「無条件の愛」も確かでないように思う時があります。そんなとき、今日の福音にある祈りを思い出してみましよう。

「わたしどのもの信仰をましてください」（ルカ17：5）

わたしたちが「魂の暗い夜」と呼ばれる時を過ごすとき、神が沈黙しているように思えるとき、空虚な心のまま必死になって神に向かって叫びましよう。

ハバクと私たち一人一人への神の返事はこのようなものです。

「私は人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。」（ハバク2：3）

神よ、あなたは私たち一人一人に無条件の愛をお与えになります。私はそれを信じます。どうか、わたしどのもの信仰を増してください。

2007年10月14日 年間第28主日(C年)

心から「ありがとう」と言われたとき、どんなに自分の心が温まるか気がついたことはありますか？ もしかすると、私達はこの「ありがとう」を口先だけで言うてはいませんか？ あるいは、贈り物や優しさなどはもらって当然で、「ありがとう」などとは言ったことがないのかもしれないかもしれません。忘恩は心を傷つけます。心のこもった「ありがとう」を一緒に住む人や共に働く人たちに言いましよう。そして、恵みを私達に降り注いでくださる神様にも「ありがとう」と言うことを忘れないようにしましよう。神様からの贈り物を私達は当たり前のこととしていないのでしょうか。今日の福音ではイエスは恐ろしい皮膚病の病人を10人治しました。9人はイエスに感謝することなくいってしまいました。一人は戻ってきて心からの感謝をイエスに伝えています。イエスは彼に愛の贈り物を与えています。私達は、このたとえ話にでてくる9人の方でしょうか、それとも戻ってきた一人の方でしょうか。ここで皆さんへ、実用的で面白い、感謝祭のお祈りのお手本をご紹介します。神様は私達が持っているもの、そして私達が今こうあることの根源です。私達が固い感謝のお祈りをする前に、私達の人生のなかで受け取ったすべての才能や魅力、長所などを再発見してみましよう。さあ鉛筆を持って紙に向かい、1から9までの自分の良い点を書き出してみましよう。（この「9」とは福音の中の恩知らずな9人にかわるものです！）静かな祈りの中で、とても面白く長らく忘れ去られていたものがよみがえって来ます。例えば、私の場合、中学のころ木工を教えてくれたロバートさんが思い出されました。いまだに木工は私の趣味で、良い気分転換になっています。神様、ありがとうございます。ありがとう、ロバートさん。神への感謝の祈りはとても大切なものです。どうぞ試してみてください。（この祈りの面白い副作用は、うぬぼれに対する心の薬として作用することです。感謝は、私の持つすべてのものは、私ではなく、神からきているのだと気づかせてくれます。）

2007年10月21日 年間第29主日(C年)

みなさんの周りに、病気で寝込んでいたり痛みに苦しんでいたりする人はいらっしゃいますか？ もしそのような人がいたらその人たちのために祈っていますか？

結婚生活 で問題をかかえている人はいませんか？ 学校でいじめにあっている子供、不幸な境遇の子供やお孫さんはいませんか？ キリスト教をあきらめてしまった人はいませんか？

そのような人たちのために、あなたはお祈りをしていますか？

自分のためでなく、人のために行う祈りは「とりなしの祈り」と言われており、今日の第一朗読（出エジプト17：8-13）に出てくるモーゼがその例です。また、今日の福音（ルカ18：1-8）ではイエスは「気を落とさずに絶えず祈らなければならない」ことを教えています。

もうひとつ、とりなしの祈りの例をご紹介します。

354年の11月3日、アルジェリアでパトリシオとモニカの間にも男の子が生まれました。彼らはその子にアウグスティヌスと名づけました。モニカは非常に熱心なキリスト教徒でした。パトリシオとモニカはアウグスティヌスに良い教育を受けさせるために、多大な犠牲を払いました。そのおかげでアウグスティヌスは大学へ進むことができ、学者への道が開けました。しかしモニカにとって残念なことに、倫理面ではアウグスティヌスは問題だらけでした。アウグスティヌスは博打好きで、愛人に息子を産ませ、モニカが信じるキリスト教を拒否し、それどころか反キリストのマニ教に走り出しました。そんな中であって、モニカは熱意をもって、神にアウグスティヌスのことについて祈り続けました。29歳の時にアウグスティヌスは出世のためにアルジェリアを去り、ローマへ向かいました。経済的な理由により、彼はさらにミラノに移り、そこの大学で弁論術を教えました。モニカは彼のために祈り続けています。当時、ミラノ総主教であったアンブローズ司教は説教が非常に上手であることで有名でした。弁論術の参考にしようと、アウグスティヌスは説教だけを聴きに行こうと、アンブローズ司教のミサに行き始めました。しかし説教の弁論スタイルだけでなく、彼は司教の伝えようとしている本質にも関心を寄せるようになりました。アウグスティヌスは再びキリストに引き寄せられたのです。387年の復活祭の夜、息子アデオダトゥスとともに、アウグスティヌスは洗礼を受けたのです。モニカが息子がクリスチャンになりますようにと祈り始めてから20年がたっていました。

これは私たちにとって、一つの良い例です。

後年、アウグスティヌスはこのように書いています。

「神よ、あなたは私達をあなたのためにお創りになりました。それゆえ、あなたの中で休むことができなければ、私達の心は休まることができません。」

母モニカの祈りによって、いま私たちは彼女の息子を「聖アウグスティヌス」と呼ぶことができるのです。

2007年10月28日 年間第30主日(C年)

あなたのお祈りは、タテマエにすぎなかったり、うやうやし過ぎたりしていませんか？ もしそうなら、そのお祈りは口先だけのもので、心からのものではありません！

神が欲している祈りは、着飾らない、本当の自分自身からの祈りである、と今日の聖書では言っています。本当の自分自身からの祈りを実践するためには、私たち人間がいか に意志薄弱で、弱く、そして罪深いかということ認識する必要があります。（今日の聖書で触れている「罪深い」という意味は、具体的に罪を犯すというよりは、私たちが 神の愛に答えなかつたり、聖書で言っているように、私たちの信仰が「的外れ」であつたりすることです。）

今日の福音では、神殿に祈祷に訪れた二人の例が示されています。ひとり是非常に敬虔な男でした。彼は（これが彼が「祈り」と思っている行為でしたが）神に次のように祈りました：「わたしはいつも長い祈りを捧げ、戒律の全てを守り、十分の一税を教会に払っています。」彼は、彼が行なったすべての「善いこと」を神に報告していますが、 実際には彼は自分自身を他人と比べ、他人と彼らの犯した「悪いこと」を裁いていたのでした。彼の「祈り」の本質は、「神よ、私はあなたのお誉めに値します」というものでした。この「祈り」のなかで、かれは他人を裁き、見下していました。この「祈り」はうわべだけの祈りであり、彼のエゴだけがでたもので、心が欠けています。

イエスはむしろ二人目の男を誉めました。この男は自らの意志薄弱さ、弱さ（つまり今日の聖書でいうところの罪深さ）を認めました。この男は、簡単で短い祈りを捧げましたが、これは私たちも使うことができる珠玉の祈りです。

「おお神よ、罪深い私をあわれんでください。」

私たちは、人間的な弱さがあることを認めますが、同時に、神がありのままの私たちを受け入れてくださるということ強く信じています。この神のあわれみは、とても寛大に私たちがいただけるものなのです。

さあ、今あなた自身の心の中では、どのような思いがはしっていますか？ それこそが、祈りの原材料となるものです。それが、神が求める祈り、着飾らない心での本当の祈りなのです。

2007年11月4日 年間第31主日(C年)

聖ルカは芸術家でした！すばらしい言葉の表現力で、聖ルカはイエスとザアカイの出会いをいきいきと描いています。これは単に2000年前の出来事の光景ではありません。イエスは今現在生きておられ、ザアカイは私たちなのです。

私たちは人間であるがゆえに、誰でも「より良きもの」へのあこがれを持っています。そのようなあこがれを私たちは普段は抑圧できているかもしれませんが、疲れたり、ストレスを感じたり、苦しんだり、あるいは傷ついた時には、強くわきあがってくるのです。忙しくしていることは、このあこがれを抑圧する手段ではありません。しかし、神のみがこの私たちの心のあこがれを完全に満たしてくれるのです。

ザアカイはお金持ちでしたが、心の中では満たされない思い、そして同じようなあこがれを持っていました。ザアカイはイエスの話を聞こうと出かけましたが、イエスに近づくことができず、また背も低かったのでイエスを見ることもできませんでした。

彼は自分の社会的な立場を忘れて、小さな男の子のように木に登り、イエスを見ました。そうするには勇気が必要でしたが、それだけザアカイの「より良きもの」へのあこがれは強かったのです。

イエスはザアカイが登っている木の下を通った時に、ザアカイ（そして私たち一人一人）を見ました。そして「友達になりましょう。」とおっしゃったのです。この友情はザアカイとその家族に大きな安らぎをもたらしました。これは、現代の私たち一人一人にあてはまるのです。私たちは、ザアカイのように、木に登る準備はできているのでしょうか？

一人静かに、私たちが持つ、「あこがれ」について感じてみましょう。祈りの形をとるのかもしれませんが。（私はこの祈りの形が好きです。それは、より親しみ深くイエスと出会いたいからです。）

あこがれは、祈りの第一歩、とても大事なステップです。試してみませんか？ 詩篇42章、「あこがれの詩篇」です。

谷川の水を求めて、あえぎさまよう鹿のように
神よ私はあなたを慕う。

私の心はあなたを求め、神の命をあこがれる。

私が行って、み前にいたり、み顔を仰げる日はいつか。

2007年11月11日 年間第32主日(C年)

この5週間、主日の朗読箇所を用いて「祈り」について説明してまいりました。しかし、「どのように祈るか」よりもさらに重要なことは、「誰」に対して祈るか、ということです。それは勿論、神様なのですが、その神様を掟と罰を与える神とイメージしてしまうと私たちの祈りは堅苦しく冷たいものになってしまいます。また、もし神様を、「誰か天上の高い所にいる方」とぼんやりと想起してしまうと、私たちの祈りもぼやけた味気ないものとなってしまいます。私たちはイエスの中に真の神を見出します。イエスの人情味のある優しさや憐み深さは、私たちの真の神の心そのものです。

イエスは私たち一人ひとりと固く約束してくださいました。

「わたしはあなたと共にいる。わたしはあなたを守る。」

イエスはこの約束を決して、たとえ私たちのほうが忘れても、絶対に破ることはありません。今日の朗読（二テサロニケ2・16-3・5）において、「主は真実な方です。（言い換えれば、“主は約束を守ります。”）必ずあなた方を強め、悪いものから守ってくださいます。」とあります。そしてイエスは、私たち一人ひとりに言っています。「あなたは私の友人である。」と。

時として祈りが、空っぽのバケツに向かって喋っているようなもの、と感じられることがあるかもしれませんが、決してそうではありません。私たちの神様は私たち一人ひとりを名前によび、私たち一人ひとりは神様の目から見て皆とても大事であり、愛してくださっているのです。（イザヤ43章）

私たちの祈りに対して、神様は常に敏感な耳を向けてくださいます。そして神様は私たちが「みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように」と祈ることを希望しているのです。神様は私たちにとってよいものだけをお与えになります。

わたくしが若かったころ、私はある試験に通るようにと非常に熱心に祈りました。そして落ちてしまいました。わたしはしばらく神様に幻滅してしまい、人生において異なる道のりを歩むことになりました。今、わたくしは結局当初望んでいた道よりもはるかに良い道を歩んでいることを実感します。今になって私は神様にあの試験に受からなかったことを感謝するのです。

神様の本質は優しく愛情深く、人間のはかなさ・弱さをよくわかっていてくださいます。福音によって神様は、今、私たちの間に生きている神であると知ることができます。

生きている声で、今神様は私たち一人ひとりに語りかけているのです。

「疲れたもの、重荷を担ってあえぐものは、私のところに来なさい。休ませてあげよう。私はあなたの名前を呼ぶ。あなたは私の、大切な人。私が愛する者。」

神様はまことに人間の同伴者であることを好みます。

私たちも是非祈りを通して、神がともに歩んでくださる幸せを味わいましょう。

2007年11月18日 年間第33主日(C年)

あなたの心に響く聖書の一節を選んでみましょう。

今週(11月18-25日)は聖書週間です。

聖書は「生きている神からのメッセージを含んでいる」という点で、ほかの本とは異なっています。神は聖書を通して私たちに語りかけていますので、もし聖書を読まず神の声を聴かないのなら何ともったいないことでしょう。「神の言葉は生きており、剣よりも鋭く私たちの心に突き刺さる」(ヘブライ人への手紙4章)といわれているとおりです。

聖書を読むにあたっては、つぎのような大事な点があります。

(1) 聖書の力を信じ、イエス様に私たちの今日の生活への意味を教えてくださいのように祈りましょう。それはちょうどイエス様がエマオへの道で弟子たちに教えことと同じです(ルカ24章)。「イエス様、私の心に聖書をお教えください!」

(2) 旧約聖書も新約聖書も時代背景は遠い昔ですが、その根本となるメッセージはまったく現代的なもので、私たちの今の暮らしにあてはまるものです。聖書のメッセージは生きているものです。

(3) 導きを願う短いお祈りのあと、聖書の一節や部分をゆっくり読んでみましょう。(ゆっくり読むことが大切です)。目的は聖書で祈る、ということです。聖書を勉強することはまったく良いことなのですが、ここでの目的ではありません。ゆっくりと祈りの心を持って聖書を読むことはとても大切です。ゆっくり読むことによってあなたの心の中に様々な反響、エコーが生じるでしょう。それらは、まさに神からあなたへの個人的な語りかけですので、耳を澄ませてみましょう。この様々なエコーは大抵あなたの心の中で今起きていることや現実の暮らしに結びつくのです。聖書(もちろん神様も)は私たちと別の世界のことでありません。

(4) 聖書を読んでいると慰めをあたえてくれる箇所を読み当たることがあります。

またその一方、私たちに挑んできたり、私たちを困らせたりする箇所もあります。前者は私たちを勇気づけ、後者は私たちの成長と成熟のためにともに必要なのです。

(5) 時として、理解できない箇所に遭遇するかもしれません。そんな時はその部分はとばして、わかるころを味わいましょう。大切なのは祈ることです。難しい部分は後で勉強しましょう。

私の好きな個所をご紹介します。

「疲れた者、重荷を負う者は誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」(マタイ11章28節)、

「わたしはあなたの名前を呼ぶ。わたしは主、あなたの神、あなたの救い主。わたしの目にあなたは価い高く貴くわたしはあなたを愛している。恐れるな、わたしはあなたと共にいる。」（イザヤ43章1節）

2007年11月25日 年間第34主日(C年)

「御子は、見えない神のすがたであります。」（コロサイ1・15）という今日の聖書の一節は、私たちキリスト教徒にとってはとても重要です。私たちは神を見ることはできません。神は目に見えないものなのです。神とはどのようなものでしょう？神は私たちに対してどのような態度をとっているのでしょうか？これらの問いはとても重要なものです。

私たちは神ご自身が御子として人間になられたと信じています。それがイエスでした。ですから、私たち人間がイエスの人間としての心を見たときに、私たちは真の神をみるのです。神の私たち人間への態度もわかります。聖書の出来事は永遠の現在形で描かれているということ思い出しながら、いくつかの例を見てみましょう。

神であるイエスは2,000年前そうであったと同じように、今も私たちに対して優しい態度を示してくださいます。

今日の福音ではイエスは十字架上で非常に苦しんでいました。そのような耐え難い苦痛の中で、イエスは悔い改めた盗人に対して優しく、励ましの言葉を与えています。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」とイエスは言っています。

イエスは木の枝の上にいたザアカイにも同じように優しいまなざしを向けました。「一緒に食事をしよう。」とさそっています。空しく無益な暮らしだったザアカイに対してイエスは新しい希望と平和を与えています。

またイエスは、一人息子を失ったナインの母親が流す悲嘆の涙を見ました。イエスは彼女と同じように、そして彼女のために悲しみました。イエスはまさに憐み深く、そのやもめの母親のためにイエスも苦しんだのです。

イエスは嫌われ者の表面的な悲しみだけでなく、内なる寂しさにも目を向けています。彼は皆とともに感じています。それがあわれみなのです。イエスは彼自身を否定したペテロにたいしても憐み深いまなざしを向けています。イエスは人間の弱さを理解しています。このような例は枚挙にいとまがありません。

これが私たちの神です。この神は今現在も生きています。私たち自身も聖書に登場してくる人達なのです。これが私たちの神であり主であるのです。

「御子は、見えない神のすがたであります。」

この一節は私にとってもっとも慰め深い教えであり、私の信仰の基礎となっています。